



年報

モンゴル・日本人材開発センター



モンゴル・日本人材開発センター



年報

(2025.01.01-2025.12.31)

2026 年



設立及び発展の経緯

モンゴル・日本人材開発センター(MOJC)は（以下モンゴル・日本センター）、モンゴルの市場経済化促進に貢献する人材の育成と、モンゴルと日本の相互理解促進を目的として、国際協力機構(JICA)、モンゴル国教育省、モンゴル国立大学の協力により、2002年に設立されました。現在、ビジネス人材の育成、日本語教育、相互理解促進をメインに活動を展開しています。日本語教育及び相互理解促進事業については、2012年より国際交流基金(JF)が協力を行っています。さらに、これまでに築いたネットワークを活かし、日本・モンゴル間のビジネス交流の橋渡しにも力を入れています。

2002年1月22日	JICA 技術協力プロジェクト第1フェーズ開始
2002年3月14日	プロジェクト開始にあわせ、日本政府の無償資金協力により、モンゴル・日本センターの施設を建設(総工費4.43億円、総床面積1,520㎡)
2002年6月21日	秋篠宮殿下・妃殿下ご臨席の下、モンゴル・日本センター開所式挙行政
2007年1月22日	JICA 技術協力プロジェクト第2フェーズ開始
2007年7月16日	皇太子殿下ご臨席の下、モンゴル・日本センター設立5周年記念式典挙行政
2009年7月3日	来館者数延べ100万人達成
2012年1月22日	JICA 技術協力・ビジネス人材育成プロジェクト開始
2012年4月1日	JFとの協力でJF講座開始
2012年4月13日	モンゴル国立大学独立採算ユニット化
2012年6月21日	設立10周年記念式典挙行政
2015年4月22日	JICA 技術協力・モンゴル日本人材開発センタービジネス人材育成・交流拠点機能強化プロジェクト開始
2016年4月1日	来館者数延べ200万人達成
2017年6月14日	金子晴彦先生ご寄贈陶芸作品「ハッピーブルーウォール」除幕式実施、展示開始
2017年6月21日	設立15周年記念式典挙行政
2020年4月22日	JICA 技術協力・モンゴル日本人材開発センタービジネス人材育成・交流拠点機能強化プロジェクト 第2フェーズ 開始
2020年10月19日	来館者数延べ250万人達成
2022年6月21日	設立20周年記念式典挙行政



ビジョン

- ▶ モンゴルの未来を担う人材の育成を通じ、モンゴル・日本両国の架け橋となることを目指します。

ミッション

- ▶ 利用者のニーズに沿ったサービスの企画・実施を通じ、モンゴル・日本両国の社会・経済の発展に貢献します

スローガン

- ▶ モンゴルの未来をここで育てよう！

私たちが提供できる価値

- ✓ モンゴルにある「日本の風景」
- ✓ 日本的なサービス・日本関連情報の提供
- ✓ 日本で培われた知識経験の提供
- ✓ 優秀な人材、モンゴル人・日本人スタッフによるチームワーク
- ✓ モンゴル国立大学を始めとする、多くの機関・団体との協力関係
- ✓ JICA、JF を始めとする、日本の関係機関による強固で継続的な支援体制



目次

モンゴル・日本人材開発センター所長 Ts.ダワードルジ.....	8
ご挨拶	
駐モンゴル特命全権大使 井川原 賢.....	10
モンゴル国立大学 学長 B.オチルホヤグ.....	11
独立行政法人国際協力機構(JICA)モンゴル事務所 所長 宮城兼輔.....	12
独立行政法人国際交流基金 (JF) 日本語第1事業部 部長 四ツ谷知昭.....	14
モンゴル・日本人材開発センター チーフアドバイザー (JICA 専門家) 佐藤 睦.....	16
I. ビジネスコース課	
1. 2025 年ビジネスコース実施報告.....	18
ビジネス人材育成コース実施状況.....	18
1) 集団研修：ビジネスコース.....	18
2) 個別研修：企業内研修、モデル企業課題解決型プログラム.....	21
3) 本邦研修.....	23
2. コラム.....	29
1) モンゴル・日本センター川口慎一郎博士 (Ph.D) がモンゴル国家勲章 「アルタンガダス勲章」受章.....	29
2) 北海道大学、北海学園大学との教授陣との共同セミナー・研修.....	29
3) 早稲田大学教授陣との共同セミナー・研修.....	30
4) 受講生の声.....	31
II. ビジネス交流課	
1. 2025 年ビジネス交流促進活動全般.....	36
2. コラム.....	40
1) モンゴル・日本ビジネスイノベーションフォーラム-2025.....	40
2) モンゴル・日本センタービジネスコース修了生向けイベント.....	42
3) 中央アジア3カ国の日本センター訪問.....	43
3) モンゴル国の「ものづくり技術の底上げ」に係わるテーマで訪日研修.....	45
III. 日本語課	
1. 2025 年日本語課全般.....	49



1) 日本語講座の概要.....	49
2) 共催事業について（主催、後援、協力を含む）.....	50
2. コラム.....	60
1) 日本語教授法コースの試み（教育講座、初中等研修、いろどり研修）.....	60
2) モンゴル・日本友好親善記念 2025 年モンゴル日本語多読本作成コンテスト.....	62
3) モンゴル・日本センターにおける渡日前日本語研修の取り組みと成果.....	63
4) 体験しながら学ぶ異文化理解活動.....	65
受託事業及び受託コースについて.....	67
1) 特定技能関連業務.....	67
2) モンゴル JDS 来日準備日本語講座.....	69
3) JICA インターンシッププログラム参加希望者対象の事前日本語研修.....	69
3. 受講生の声.....	70
IV. 図書交流課	
1. 2025 年図書交流課活動全般.....	81
1) 図書室運営.....	76
2) 読書会.....	76
3) 市民講座.....	77
4) 受託事業.....	77
2. コラム.....	81
1) 「2025 年度の日本留学フェア」.....	81
2) モンゴルで日本高校留学フェアを初開催.....	83
3) 国際交流基金（JF）「日本語パートナーズ派遣事業」開始.....	85
4) 一般向けモンゴル・日本文化紹介特別講座および公開セミナー.....	86
V. 総務課	
1. 2025 年総務課活動全般.....	99
2. コラム.....	101
1) ワーキンググループ.....	101
2) 「モンゴルと関わった 50 年間」講演会.....	101
VI. チーム活動	



1. 2025 年度の活動全般.....	104
1) 広報チーム.....	104
2) 5S 改善チーム.....	105
3) 健康・スポーツチーム.....	107



序文



年間の事業を総括する私たちの恒例の取り組みとて、2025年の事業を皆様にご報告できることを大変嬉しく思います。

2025年は、弊センターの事業が計画どおり順調に進められ、多くの新たな取り組みを実施いたしました。毎年の事業の着実な遂行、そしてその拡充と発展をご報告できることに、私どもは大きな喜びと誇りを感じております。

また、2025年にはJICAプロジェクトの新たなフェーズが開始され、日本人専門家の交代も行われました。そして、2025年の弊センターは289件の事業を計画し、実際には296件を実施いたしました。計画していた事業のうち5件は未実施となりましたが、計画外の新規事業を12件実施した結果、全体として事業実施率は102%となりました。

前年（2024年）を上回る成果となったことをご報告できることを、大変励みとしております。2025年、弊センターでは常勤職員31名、日本人専門家4名、受付の時間勤務職員12名、非常勤講師5名、現地講師8名が勤務いたしました。本年は、職員の異動・入替が前年までと比べて高い水準となりました。

また、弊センターの常勤職員平均月給は240万トウグルグに達し、前年より10%増加いたしました。モンゴル国の平均賃金水準に相当する水準ではあるものの、実質所得は前年と同水準を維持しております。

日本からは4名の専門家が長期派遣として勤務しております。また、さらに1名の専門家が派遣予定でありましたが、所定の期間に着任することができませんでした。

2025年の見込み実績については、収入が計画を2.1%上回り、支出を3.1%削減することができました。日本のJICAおよびJFからの支援は従来どおり継続されており、年間総予算の13%は日本側からの支援によって賄われております。

2025年の報告書は、前年同様、電子形式で作成しており、詳細につきましては本冊子（本電子冊子）でご覧いただけます。

日頃より弊センターの活動をご支援・ご協力いただいております。日本およびモンゴルのすべての関係機関、ならびに関係者の皆様に、心より深く感謝申し上げます。

皆様のご支援、ご協力、そして皆様とのご連携があつてこそ、弊センターの事業は常に前進し、着実な成果を上げることができております。



弊センターの職員一同、今後も一層努力し、自らの能力と知識を最大限に発揮して業務に取り組んでまいります。皆様からのご支援、ご協力、ご連携を力に変え、弊センターの名誉をさらに高めていくことをお約束いたします。

モンゴルの明るく希望に満ちた未来のために、モンゴル・日本センター職員一同、全力を尽くしてまいります。皆様のご健康とご多幸を心よりお祈り申し上げます。
ありがとうございました。

モンゴル・日本人材開発センター所長
Ts. ダワードルジ



ご挨拶



2025年の二国間関係を振り返りますと、やはり両国関係史に燦然と輝く金字塔として刻まれることとなった、天皇皇后両陛下のモンゴル御訪問が思い出されます。モンゴル国民の皆様からも大変温かい歓迎を受け、両陛下はモンゴル御滞在を心から堪能されておられました。この御訪問の実現は、フレルスフ大統領閣下をはじめ、モンゴル政府、関係機関及び日頃から両国関係発展のために御尽力されている全ての皆様の御協力、御支援の賜物であり、御訪問を経て両国の友好関係が一層強固なものになったと私自身確信しています。御訪問にかかわった全ての関係者の皆様に対し改めて厚く御礼申し上げます。

両国関係については、2022年に発表された「平和と繁栄のための特別な戦略的パートナーシップ」の下、政治、経済、社会、文化、医療、スポーツ等幅広い分野における交流が着実に拡大、深化しております。両国関係の発展において、全ての基盤となるのは「人」であり、特に若い世代の人材が求められます。両陛下の御訪問を二国間関係のピークとすることなく、今後の更なる高みへとつなげていくためにも、各分野における次世代を担う人材の育成は不可欠であります。モンゴル・日本人材開発センターにおかれては、設立以降、ビジネスコースや日本語教育を通じて多くの人材を育成してきていますが、その役割はますます重要性を増しており、両国の交流の中心的存在としての期待も大きくなっています。

日本センターは、日本の無償資金協力によって設立されてから20年以上が経過していますが、独立採算制に移行してからも長年の経験の蓄積とセンター所員の新しい発想に支えられ、両国の文化及びビジネス交流促進のための事業に真摯に取り組んでこられました。昨年5月からは日本センターにおける新たなJICA技術協力プロジェクトが開始されましたが、日本センターが今後、日本の知見等を取り入れつつ、二国間のあらゆるレベルでの交流拠点として自立した存在となれるよう、より一層の御発展と御活躍を期待しております。そして、日本センターで学んだ多くの人材が将来モンゴルを背負って立ち、両国関係のさらなる発展に力強く貢献していくことを願っています。

駐モンゴル特命全権大使

井川原 賢



ご挨拶



モンゴル国立大学とモンゴル・日本センターは教育、人材育成、ビジネス、イノベーションに基づく協力活動を通じて、モンゴルと日本の戦略的パートナーシップを強化する上で重要な役割を果たしてきております。

特にモンゴル・日本センターは、人材の質と競争力の向上、労働市場のニーズに応じた人材育成、そして両国の経済・社会の持続的な発展に具体的に貢献することを目標にしており、その取り組みを着実に進めております。

モンゴル・日本センターは、国家、大学、民間企業、国際協力機関との連携に基づく効率的な体制を整えており、両国間の交流を長期的かつ持続可能な形で発展させる政策上の重要な柱であることを、ここに強調いたします。

モンゴル・日本センターの活動を長年にわたりご支援いただいております在モンゴル日本国大使館、国際協力機構（JICA）、国際交流基金（JF）、モンゴル国教育省、大蔵省、経済・開発省、家族・労働・社会福祉省ならびに関係機関の皆様、この場をお借りして深く感謝申し上げます。

2025年度よりモンゴル・日本センターをカウンターパートとした JICA プロジェクトの新フェーズが開始されたことに伴い、研修、調査、ビジネス交流、人材育成における連携体制がさらに強化され、その制度的枠組み、成果、持続的な協力が具体的に実施されることにより、両国の経済的なつながりを支え、将来を担う人材育成に一層貢献するものと期待しております。

モンゴル・日本センターの皆様とパートナーの皆様との共同の努力がさらに強化され、両国間の協力が一層拡大していくことを心より願っております。

モンゴル国立大学 学長
B.オチルホヤグ



ご挨拶



モンゴル・日本人材開発センター（以下、モンゴル・日本センター）における JICA 技術協力は、2025 年より待望の新フェーズ「日本・モンゴル間の経済連携強化に向けたビジネス促進プロジェクト」へと移行いたしました。日本センターは 2002 年、日本の無償資金協力により建設され、以来、一貫して JICA は技術協力を通じてその活動を支えてきました。前フェーズの 5 年間は、パンデミックや世界情勢の不確実性が続く中でも、モンゴルの民間セクターの発展と強靱化に大きく貢献してきました。これまでモンゴル・日本センターの運営を支えてくださった関係者の皆さまのご尽力に、心から敬意と感謝を申し上げます。

謝を申し上げます。

モンゴルは資源依存からの脱却と産業の多角化と持続的な成長を一貫した国家課題として掲げ、Vision2050 などの国家政策のもとで具体的な施策を進めてきました。特に、日本との関係においては、日モンゴル経済連携協定（EPA）の締結から本年で 10 年目を迎え、両国間のビジネス交流を一層促進する人材の育成と企業の発展は急務です。

こうしたニーズに応えるべく、JICA の技術協力の新フェーズでは日本の高度な知見を取り入れた新たなビジネスコースとして、日本の大学や民間企業と連携して「事業多角化」や「女性起業家向けセミナー」、「経営シミュレーション」といった専門コースを開講しました。加えて、現地講師向けの育成プログラムも実施し、日本センター自体の指導機能の強化を図っております。

また、ビジネス交流支援の一環として、モンゴル・日本ビジネスイノベーションフォーラムの企画・運営や、CEO 向けビジネスコース修了企業を対象とした本邦研修、アジア最大級の食品・飲料展示会「FOODEX JAPAN」における「モンゴリアン・パビリオン」の出展とモンゴル企業の参加支援などに取り組んでおり、こうした具体的なビジネス交流、マッチング支援は、新プロジェクトにおいても活動の大きな柱となります。

加えて、モンゴルの大学生・高専生を対象にした本邦企業へのインターシッププログラムの「渡日前研修（日本語、日本文化理解、ビジネスマナー等）」の受託や、日本の大学・高校留学フェア（各年 2 回）なども実施しています。

新たなプロジェクトにおいて、JICA は日本センターが今後も日モ両国間協力の架け橋として、ビジネス人材育成や両国のビジネス交流を促進する機能を一層強化できるよう、協力



を行って参ります。引き続き皆さまのご支援を頂戴いたしたく、よろしくお願い申し上げます。

JICA モンゴル事務所 所長 宮城兼輔



ご挨拶



モンゴル・日本人材開発センター（以下、モンゴル・日本センター）は、2002年の開設以来、モンゴルの経済発展やモンゴルと日本の相互理解促進に貢献する多くの人材を輩出してきました。また、日本語教育の普及につきましても、たゆまず尽力してこられました。この場をお借りして、ダワードルジ所長をはじめとする関係者の皆様に心から御礼を申し上げます。

私ども国際交流基金（以下、JF）は、モンゴル・日本センターの4つの柱であるビジネス人材育成、日本語教育、相互理解促進、モンゴル人材キャリア支援のうち、特に日本語教育と相互理解促進について、ともに歩んで参りました。2002年から現在まで日本語専門家を派遣し、また2012年4月からは、「JFランゲージセンター」として、モンゴル・日本センターと共同で「JF日本語講座」を開始しました。JF日本語講座では、日本語で何がどれだけできるかという「課題遂行能力」や相手の文化を理解し尊重する「異文化理解能力」の育成を重視した「JF日本語教育スタンダード」に準拠した講座を開講しています。また、同講座ではJF開発教材『まるごと日本のことばと文化』を使用し、入門レベルから中級レベルまでのコースが開講されてきました。さらに、同センターでは、より上級者向けのコースや、夏季には子供向けの日本語講座など、鋭意、モンゴルにおける日本語学習者のニーズや日本語教育の状況に応じた様々な新たなコースの提供にも取り組んでいます。

特に2024年度は、高まる需要を受けて新たに「日本語ガイド上級コース」や「JICAインターンシッププログラム参加希望者対象の事前日本語研修」を実施した他近年は就労現場で必要な日本語に対するニーズの高まりに伴い仕事で役立つ実践日本語講座を実施する等、その活動の幅を大きく広げています。また、上記のような対学習者支援だけでなく、モンゴルにおける日本語教育のさらなる普及を目指し、日本語専門家とともに初中等教育機関の日本語教師を対象とした教授法研修の実施や、2019年に創設された在留資格「特定技能」制度で来日して日本で生活する方々のためにJFが開発した新教材『いろどり生活の日本語』についての日本語教師向けの教授法セミナーを実施する等、日本語教師の育成にも取り組んでいます。

なお、2024年9月22日の日・モンゴル首脳会談を受け、JFは2025年度よりモンゴルに日本語パートナーズ（以下、NP）を派遣することを決定しました。今後の派遣に向けて、日本センターをはじめとした関係機関のお力添えをいただきながら、着実に準備を進めてまいります。



JF は、今後もモンゴル・日本センターとともに、モンゴルの皆さんが日本語や日本文化に出会い、学ぶ機会を提供していく所存です。そして、モンゴル・日本センターが日本語教育や日本文化発信の拠点として、ますます発展され、モンゴルと日本の架け橋となる人材が一人でも多く輩出されることを心から祈念いたします。

独立行政法人国際交流基金 日本語第1事業部 部長

四ツ谷知昭



ご挨拶



2025年4月から5年間の予定で新たなJICA技術協力プロジェクトが開始されました。モンゴルのビジネス人材のキャパシティビルディング、日本とモンゴル企業との交流機会の拡大、モンゴル人材のキャリア支援が主な目的です。ビジネス交流分野の専門家の着任が遅れていましたがようやくその目途も立ち、フルパワーで活動を進められる状況になりました。

2025年はいくつかの新しい活動に取り組みました。北海道大学や早稲田大学の教員と連携した新しいビジネスコースの実施、日本の企業活動の現場をモンゴルのビジネスパーソンに視察していただくMOJC独自ツアーの企画・運営、日本企業でのインターンシップに参加するモンゴル人学生に対する渡日前研修事業の受託、日本の高校への留学フェアの開催などです。いずれも期待を超える成果を出すことができました。日本人専門家のみならずMOJCスタッフも新しくチャレンジすることの意義を理解し、充実感を抱いてくれました。これらの成果をさらに拡大・発展させるべく、2026年もさまざまな事業に果敢に取り組んでいきます。

この5年間のプロジェクト期間中に強く求められることは「MOJCの自立化」です。個々のスタッフの能力向上に加え、財政面や人的ネットワークを含めた「総合的な組織力強化」が問われることとなります。その過程では困難な問題が少なからず発生するでしょうが、全員で力を合わせて乗り越えていきたいと考えています。

2025年4月に着任以来強く感じるのは、ビジネスコースの日本人講師をはじめMOJC活動に関わっていただいている日本人の方々のモンゴル人材への高い評価です。「日本での仕事よりMOJCでの仕事の方が面白い」と話してくれる方もいらっしゃいます。このような方々との関係を大切にしながら引き続きプロジェクト活動を進めてまいります。モンゴル国立大学、日本国大使館、JICAモンゴル事務所、モンゴル関係省庁の皆様には引き続きプロジェクトへのご理解とご協力をいただきますようよろしくお願い申し上げます。

モンゴル・日本人材開発センター
日本・モンゴル間の経済連携強化に向けたビジネス促進プロジェクト
JICA 専門家 (チーフアドバイザー) 佐藤 睦



I. Бизнесコース課





I. 2025 年ビジネスコース実施報告

モンゴル日本人材開発センター（以下、「日本センター」）ビジネス課では、JICA（国際協力機構）の支援を受け、モンゴルのビジネス人材育成のために必要な事業を実施している。

2025 年度の通常コースは、経営者クラスで 7 科目、管理職クラスで 6 科目をそれぞれ年 2 回実施し、合計 27 回を開催した。また、基礎コースは 9 科目を 1 回ずつ、人事管理（HRM）科目は 2 回、専門コースは 11 科目をそれぞれ 1 回実施した。さらに、企業内（オンサイト）研修は 20 社に対して計 32 回実施し、すべて成功裏に終了した。

さらに、北海道大学および早稲田大学の教授陣を招き、「経営シミュレーション」「ビジネス研修の効果的な教授法」「多角化戦略」「女性の視点から見た新しいビジネス」などの研修を開催したことも特徴的でした。

2025 年の総受講者数は 3,204 名となり、モンゴル・日本センターのビジネスコースは、豊富な経験を持つ日本人およびモンゴル人講師が担当し、実務に直結する知識を提供したことが大きな強みとなった。受講者の 95%以上が研修を高く評価し、学んだ内容を職場で実際に活用していると回答している。

～ビジネス人材育成コース実施状態～

モンゴル・日本センターでは通常コースに加え、受講者のニーズに応じて 3～5 日間の専門コースや基礎コースも対面で実施している。そのほか 企業内研修（オンサイト研修）や、モデル企業問題解決プログラムの一環として、さまざまな研修・コンサルティングプログラムも展開している。

1) 集団研修：ビジネスコース

①**通常コース（中小企業経営診断・指導実践講座）**は日本センターの代表的コースであり、年に 2 回（秋期コースと冬期コース）行なっている。本コースの目的は経営の基本を学び、その能力を向上させることによって、モンゴルの中小企業育成ひいてはモンゴルの経済発展に貢献することである。



写真1. 通常コース経営者クラス「経営戦略」コース 写真2. 通常コース 管理職クラス「財務管理」講義

通常コース（中小企業経営診断・指導実践講座）は受講者のニーズに合わせ、年2回（秋期・冬期）開講している。本研修の目的は、市場経済の発展に貢献できる人材を育成し、モンゴルの企業の成長、ひいてはモンゴル国の経済発展に寄与することにある。

ビジネスの通常コースは、受講者を「経営者クラス」と「管理職クラス」の2つのクラスに分け、マネジメントの主要4科目を中心に実施している。主な内容は以下の通りである：

- 戦略的マネジメント
- マーケティング
- 財務管理
- 人的資源管理（HRM）

また、導入講義として以下の科目を追加で学び：

- 日本式経営
- 5S・カイゼン活動

さらに、経営者クラスでは追加科目として、企業や組織が方針・計画・基準・手法および関連法令・規則を遵守し、その実施状況を管理するための「コンプライアンス」について体系的な研修を行った。

本年度、ビジネス通常コースは春期・秋期の2回、対面形式で無事に開催され、4クラスにおいて合計141社・146名の経営者およびマネージャーが受講し修了した。



例年と同様に、研修は理論と実践を組み合わせた形式で行われ、受講者は自社の事例や直面している課題について自由に意見交換を行い、専門講師から学ぶだけでなく、互いに学び合う環境が形成された有意義な研修となった。

また、本年度の第2期生、すなわち管理職クラス第27期の授業は、現地講師が担当した点が新たな取り組みとなった。現地講師が研修を主導することにより、通訳を必要とせず、現場で日々課題に向き合うマネージャーにとって、多様で実践的な内容をより充実させることが可能となった。

さらに、管理職クラスでは1社から3~4名の受講が増えており、経営層と中間管理職が共通の理解を持つことで、その企業の成長により大きく寄与するという利点が見られた。

②専門コース:より高度なビジネスの専門知識を学ぶ「ビジネスプラン」 研修を2回、「顧客サービス」、「経営シミュレーション」、「店舗管理」、「エクセルを使ったビジネス分析」、「Global Value Chain」、「生産管理」、「マーケティング」などのテーマで研修を実施した。

また、新たに北海道大学および早稲田大学の教授を招き、「経営シミュレーション」、「ビジネス研修を効果的に教える方法」、「女性の視点から見た新しいビジネス」、「多角化戦略」といったテーマの研修も対面で開催した。これらの実践研修には、合計 355 名 が参加した。



写真3. 「店舗管理」専門コース



写真4. 「ビジネスプラン」専門コースの様子

③基礎コース

ビジネス経験が浅い方に向けた基礎コースは2016年から実施している。2017年からは土曜日に行くようになり、より多くの人々が参加できるようになるとともに、休日にマネジメントの効果的な勉強ができるようになった。



本年は、基礎コースの理解度および成果を高めることを目標に、全て対面形式で研修を実施した。実施した研修のテーマは、「人事管理（HRM）」を2回開催したほか、「店舗管理」、「5S活動」、「マーケティング」、「生産管理」、「財務管理」、「プロジェクトマネジメント」、「経営戦略」、「マネジメントシステムとガバナンス」である。



写真5. 「人事管理」基礎コース



写真6. 「財務管理」基礎コース

2) 個別研修：企業内研修、モデル企業課題解決型プログラム

ビジネス環境の変化と競争の激化を受け、多くのモンゴル企業において組織戦略に基づく企業全体の強化、全従業員の知識・能力向上を図る動きが目立ってきている。このため、会社全体で積極的に研修に取り組み、社内で統一した知識を得たいとの希望が増加している。このようなニーズに応えるため、モンゴル・日本センターでは企業内研修とモデル企業課題解決型プログラムを実施し、モンゴル企業の経営合理化と競争力強化に力を入れている。



写真7. Jur Ur社における「人事管理」研修



企業内研修では、JICA の専門家と現地講師が会社の依頼通り、企業現場の課題を



写真8. Carbon composites 社における研修

解決するために研修を実施している。2025年には16社にて26回の研修を実施し、計814名が参加した。特徴として、Jur Ur社の経営陣向けに経営知識・能力の向上と総合知識を教えるための合計64時間の研修を当センターの現地講師のN.Batdelger（経営戦略）、D.Dashmaa（人事管理）、B.Ugtakhjargal（マーケティング）、

B.Munkhtsog（財務管理）が指導した。

モデル企業課題解決プログラム

本プログラムの一環として、LED照明の組立・製造分野で事業を行う「And-Energy社」、土壌および建築材料分野の調査・試験サービスを提供する「Namnan Industry社」、さらに平面計画図、展開図、3D図、ディテール図などの図面作成を行う日蒙合弁企業「MYK社」の計3社に対し、それぞれのニーズに合わせた研修・コンサルティングを日本人講師及び現地人講師が連携して段階的に、各社に適した内容で実施し、成功裏に完了した。

本プログラムに参加しているAnd-Energy社とMYK社に対しては、会社全体の経営戦略の策定、およびそれに連動した部門戦略の策定を中心に支援した。また、Namnan Industry社には、人材開発、特に同社の中核を担う中間管理職の教育・育成、人事方針・計画、コンピテンシー、人事目標管理（MBO）によるマネジメント指導などの内容で、主に研修・コンサルティングを実施した。

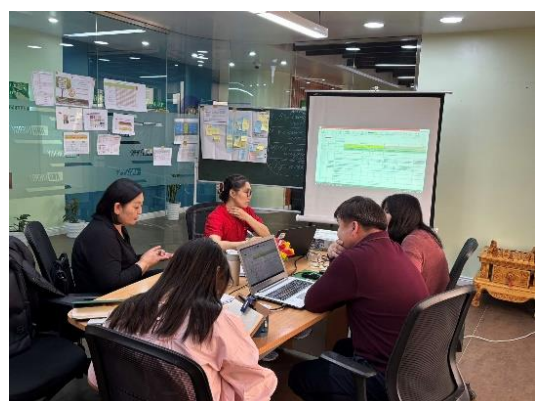


写真9. And Energy社における「人事管理」研修



3) 本邦研修

2025年10月、日本の首都である東京およびその周辺の主要な県（埼玉、神奈川、群馬）において研修を実施し、ビジネス基礎コースの修了生15名、モデル企業問題解決型プログラム修了企業2社の代表者、国内トレーナー3名、モンゴル・日本センターの職員2名、合計22名が参加した。

本邦研修は、通常コースで学んだ内容を日本企業がどのように実践しているのかを現場で確認し、日本的経営の根幹である「カイゼン」を導入することでどのような成果が得られるのかを理解してもらうことを目的として、2003年より今日まで継続して実施してきた。

日本企業の実情を直接観察することで、「私たちはどのレベルを目指すべきなのか」というモデル像を自分の目で確かめ、現場から学ぶことができる。その経験は、企業の効率的な組織運営や意思決定に良い影響を与え、結果としてビジネス研修の成果が真の意味で実践され、ひいてはモンゴルの中小企業の発展に大きく寄与するものと期待している。



写真10. 「明治なるほど」工場



写真11. 「オリヒロ社」訪問

「ビジネスと人権」に関する興味深い講義を受けた。さらに、マーケティング講師である平川雅一氏のガイダンスのもと、東京の銀座にある大型店舗を視察してそのコンセプトを学ぶとともに、10社以上の経営陣および関係者と面会した。

今回の研修では、関西大学の後藤健太教授がリーダー講師を務め、企業訪問で目にした内容を理論的な視点から丁寧に解説して下さった。そのため、非常に有益で理解が深まる研修となった。また、JETROアジア経済研究所の山田美和先生による



写真12. 「銀座地区にある『ドンキホーテ』店舗視察



さらに今回の研修には、モンゴル・日本センターの現地講師の能力強化および経験共有を目的として 3 名の講師が参加し、企業訪問後に講師間での振り返りを実施するなど、講師と受講者が互いに学び合う有意義な研修となった。



QR 1 本邦研修(モンゴル語)



QR 2 本邦研修動画(モンゴル語)



ビジネス人材育成事業の数値指標

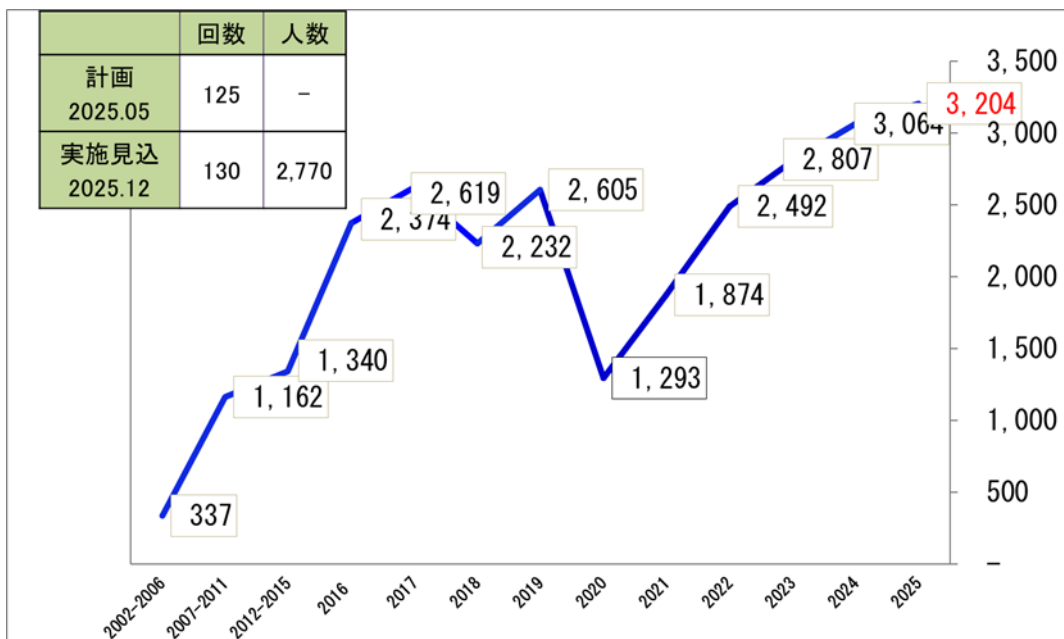
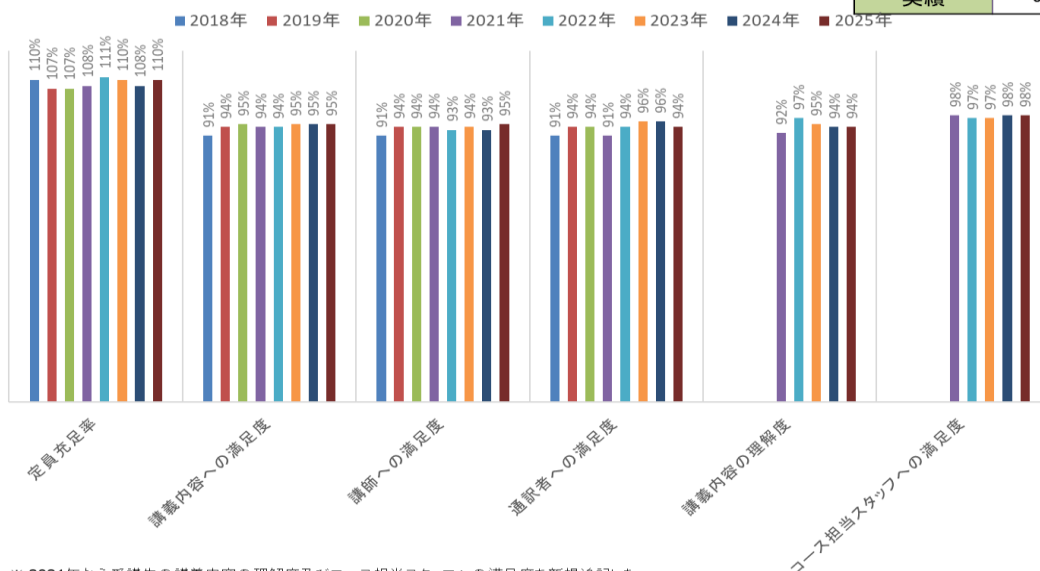


写真 10. (株)豊田自動織機訪問の際

グラフ 1. 2002-2024 年のビジネス育成事業参加者数

ビジネスコース質的指標

	達成度
2025.05 計画	95%以上
2025.12 実績	98%



※ 2021年から受講生の講義内容の理解度及びコース担当スタッフへの満足度を新規追記した。

14

グラフ 2. 2018-2024 年ビジネスコース質的指標



参加企業および参加者の統計

主要指標

3,204

受講者数

1,609

企業数



グラフ 3. 主要指標

講義内容及び教え方



グラフ 4. 品質評価

品質評価

95%

満足度

すべての指標は目標値を上回り、特に従業員のコミュニケーションと態度に関する評価が最も高く、98%となった。





表 1: 企業内研修

企業名	テーマ	期間	講師	受講者数
Gerege Tourist Passport 社	経営戦略	2025.1.31	河口慎一郎	3
MAK 社	5S 活動・カイゼン	2025.2.13	D.Dolgormaa	3
Milaya 社	戦略の必要性	2025.2.17	N.Batdelger	3
Milaya 社	組織の倫理	2025.3.18	N.Batdelger	3
Carbon composites 社	経営戦略	2025.3.19	N.Batdelger	3
Carbon composites 社	人事管理	2025.3.20	D.Dashmaa	3
Carbon composites 社	異文化理解	2025.3.21	中村専門家	3
Jur Ur 社	経営戦略	2025.3.31-4.3	N.Batdelger	16
Jur Ur 社	人事管理	2025.4.7-11	D.Dashmaa	16
PC Mall 社	店舗管理	2025.4.16	J.Gansukh	4
Minii delguur	5S 活動	2025.6.5	D.Dolgormaa	4,5
PSST 社	プロ・マネ	2025.6.6	B.Munkhtsog	3.5
Erdenes Tavan Tolgoi 社	5S 活動・カイゼン	2025.4.29	D.Dolgormaa	6
PSST 社	経営戦略	2025.6.7	N.Batdelger	5
Jur Ur 社	マーケティング	2025.8.11-15	B.Ugtakhjargal	16
Land Bridge 社	エクセルを使ったビジネス分析	2025.8.18	N.Batdelger	5
GN Beverages 社	日本的経営、コーチング	2025.9.4	出口智	3
Jur Ur 社	財務管理	2025.11.12,14,18,24	B.Munkhtsog	16
Go to Market 社	店舗管理	2025.11.19	J.Gansukh	4
Narumi 社	投資コンサルティング	2025.12.17	平川雅一	2



Ubcab Eats 社	マーケティング	2025.12.20	平川雅一	2
NUBIA 社	企業文化と日本的経営	2025.12.2	J.Khishigjargal	2
NUBIA 社	企業文化と日本的経営	2025.12.5	J.Khishigjargal	2
NUBIA 社	企業文化と日本的経営	2025.12.8	J.Khishigjargal	2
NUBIA 社	企業文化と日本的経営	2025.12.9	J.Khishigjargal	2
NUBIA 社	企業文化と日本的経営	2025.12.12	J.Khishigjargal	2



コラム

1) モンゴル・日本人材開発センターの川口慎一郎博士 (Ph.D) がモンゴル国の国家勲章「アルタンガダス勲章」を受章

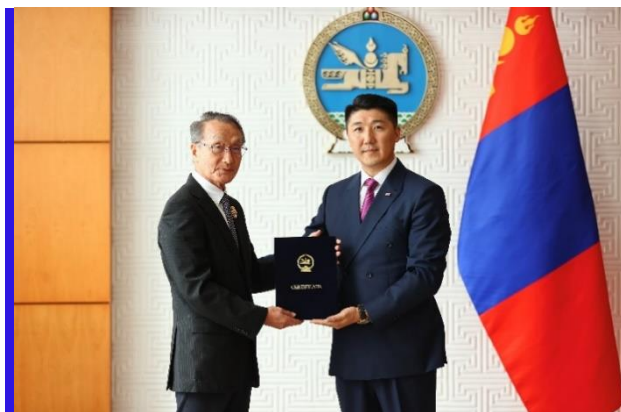


写真13. 河口真一郎博士「アルタンガダス」授章式

モンゴル・日本センターが設立された2002年以来、河口慎一郎博士は23年にわたりモンゴルの起業家育成とビジネス人材開発に尽力してきた。この期間、企業経営の基盤となるビジョンやミッションの重要性、そして組織の方向性を示す戦略計画の立案方法をモンゴル企業の経営者および管理職へ指導し、多くの優秀な経営者を育成

してきた。

授章式では、モンゴル国大統領より「モンゴルのビジネス人材育成、経営アドバイス、両国のビジネス協力強化に貢献した功績」を高く評価し、本勲章を授与する旨の祝辞が特別に伝えられた。

2) 北海道大学、北海学園大学教授陣との共同セミナー・研修

モンゴル・日本センターは本年度より、JICA と協力し、日本の大学教授を招聘した新たなビジネス研修を開始した。その一環として、北海道大学および北海学園大学と連携し、初めてとなる「新しい経営スタイルと事業多角化戦略」専門コースを開催した。本コースは、北海学園大学の佐藤大輔教授、北海道大学の椎名望准教授が担当した。



写真14. 多角化戦略の講演

本研修には、経営者、管理職、新規事業を模索する起業家など計42名が参加し、講義・グループワーク・議論を通じ、ビジネス基礎、マーケティング、新規事業戦略、ビジネスモデルキャンバスなど幅広いテーマを学んだ。世界情勢や消費者



行動が絶えず変化する現代において、一つのビジネスに依存するリスクを理解し、多角化の重要性を学ぶ大変有意義な内容となった。

また、女性起業家の能力強化を目的とした「女性の視点から見た新しいビジネス」

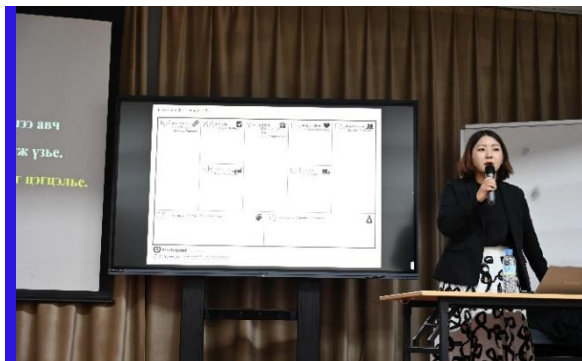


写真 15.女性向けプログラムの様子

のセミナーも成功裡に開催された。モンゴルのビジネス分野で活躍する女性30名が参加し、「ビジネスとは何か」という基礎概念から始まり、世界で成功した女性起業家の実例を用いたワークショップが行われ、革新的かつ実用的な学びの場となった。

日常の課題や改善点を社会的目的と関連付け、新たなビジネスアイデアへと発展させるプロセスについても、参加者同士がグループワークやディスカッションを通して深く考察する機会となった。

3) 早稲田大学教授陣との共同セミナー・研修

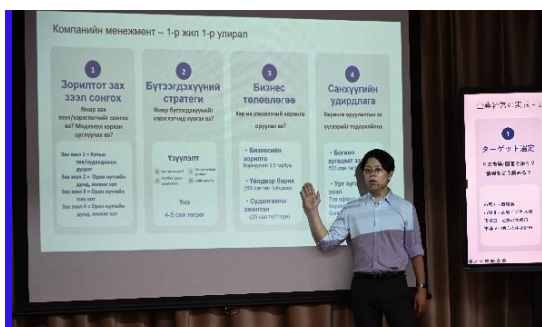


写真 16. 経営シミュレーションコース

本研修もモンゴル・日本センターが JICA と連携して実施する、日本の大学教授を招聘した高度ビジネス研修の1つである。研修は、Score 株式会社 CEO の須藤翔氏、早稲田大学大学院経営管理研究科の佐藤克広教授が担当した。そして、現代の経営モデルを用いて意思決定をシミュレーションし、結果を予測

できる最新のシミュレーションプログラムを活用した **意思決定研修** を実施した。

Score 社が開発した「**Business Management Game (BMG)**」は、参加者が企業経営者の立場で研究開発、市場調査、財務管理などの意思決定を行い、その結果をシミュレーションで検証できる教育ツールである。参加者は今回、初めてモンゴル語版を使用し、チームごとに「売上 10 億円を達成する」という目標に基づき経営判断を行った。



写真 17.演習の様子



写真 18. 演習の様子

研修後半の3日間では、佐藤教授が経営戦略の講義を行い、参加者はチームで「日本の低価格かつファッショナブルなアパレル企業がモンゴル市場に参入する戦略」について演習を実施した。最終日のプレゼンテーションでは、モンゴル市場の特性に基づいた独自戦略が発表され、互いに学び合

う活発な雰囲気が生まれた。

参加者からは、

- 「現状に即した内容で非常に良かった」
- 「実務にすぐ活かせるシミュレーション手法を習得できた」
などの高い評価が寄せられた。

さらに、佐藤教授らにより、講師および大学教員を対象とした「起業家および企業人に向けたビジネス教育の教授法」の特別講義も開催された。本講義には、モンゴル国立大学および地方大学から計60名（25日：28名、26日：32名）が参加した。

特別授業では、教授が担当するビジネススクールにおける平均年齢37歳の学生の特徴に触れつつ、

- アカデミック教育と職業教育の違い
- 実務経験者の効果的な学習方法
- 教員の姿勢やディスカッション活性化の手法
などについて詳しく解説した。

特別コースでは6つのアクティビティを取り入れた。講師はそのアクティビティを活用し、教えている内容をより深く理解してもらう、ただゲームを楽しんで終わるのではなく参加者を巻き込む、そのゲームから何を学ぶのか、その学びをどのようにフィードバックするのかについてレクチャーをした。

特別コースにはモンゴル日本センターの管理職及び現地講師、モンゴル国立大学と生命科学大学の教員の合計21名が参加した。特別コース後のアンケート評価の結果によると、教員もみなさまが今後のご自身の授業の取り入れるアクティビティ



を学び、その重要性を改めて理解した、ニーズに合った特別コースだったのではないこといえる。

2024年11月12日～13日にエルデネット市にて「人事管理」基礎コースをオルホン県商工会議所の協力の下で実施し、モンゴル・日本センター現地講師のD.Dashmaaが担当し、コースにはエルデネット市で様々な事業を行っている企業の代表である16名が参加した。参加者は非常に積極的で、学ぶ意欲が非常に高かったことが印象的だった。また、参加者は人事管理において直面している課題を協力し合い、意見交換をしながらお互い学び合う姿勢を持って参加していた。これはコースを効果的に実施できた要素の一つであったと言える。



4) 受講生の声

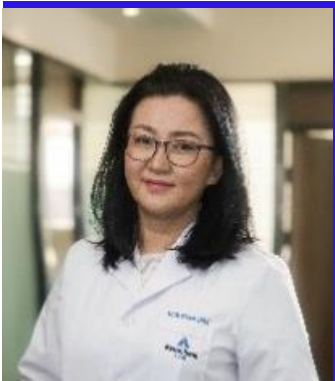


写真 19. M.Enkhmandakh
Inno chem lab 社 CEO

私私は、2024年に会社の支援のもとでモンゴル・日本センターの「経営者クラス」に参加し、同コースを通じて得た新たな機会を活かし、同年にモンゴル国立大学経営大学院経営学修士課程に進学し、経営学修士号を取得した。

モンゴル・日本センターの研修は、単なる理論習得にとどまらず、日本式経営哲学に基づき、実際のビジネス現場で応用できる実践的アプローチが特徴だった。その学びの延長として、私は日本での研修・視察を行う奨学プログラムに選抜され、2025年春、国際的な食品産業の大型イベントである「FOODEX Japan 2025」に合わせて実施された研修に参加した。これにより、食品産業の最新動向、品質管理、輸出、販売戦略についての理解を一層深めることができた。

特に研修では、世界的企業が実践する品質・標準化の仕組みを直接目にし、それらを技術革新とどのように結びつけ、賢明に実現しているのかを学んだ。また、現場の専門家から日本式マネジメントを直接指導いただいたことは、非常に意義深い経験だった。

これらの研修・プログラムを通じて得た知識と経験は、創業間もない弊社にとって大きな価値をもたらし、戦略立案、マネジメント、人材育成の面で日本式の「緻密さ」と「継続的改善（カイゼン）」の思考を取り入れる基盤となった。その結果、当社はモンゴル・日本センターの「モデル企業育成プログラム」に採択され、2025年～2026年にかけて、中期経営戦略や人事方針を組織全体で策定し、体系的に実行しているところである。

モンゴル・日本センターの研修を通じて私が得た最も大きな価値の一つは、日本式マネジメントの知識であると同時に、同じ志を持つ仲間・クラスメートと出会えたことである。互いに学び合い、励まし合う環境で学べたことは、私の専門性だけでなく、人格的成長にも大きな影響を与えてくれた。この場を借りて心より感謝している。

M.Enkhmandakh /Inno chem lab LLC – CEO/



写真 20. S.Evshinkhorloo
Bozzolo アパレルデパート社 CEO

私は 2019 年にモンゴル・日本センターの「管理職クラス」に入学し、初めてこのセンターとの縁が始まった。当時得た知識や経験、そして日本のビジネス界の最新情報は、実務において大きな変化をもたらし、効率的に働くための強力な推進力となった。その貴重な経験に基づき、現在は「経営者クラス」へとステップアップし、知識の幅をさらに

広げているところである。

今回の講座では、人事管理の枠組みの中で「従業員の等級制度（グレーディング）」という極めて重要なテーマを学び、現在、自社で早速導入を進めている。具体的には、販売部門のスタッフを能力に応じて 3～5 段階のランクに分け、新人の適応プログラム（オンボーディング）と連動させたり、次のランクに昇進するために必要なスキルを明確化したりといった取り組みを始めた。見落とされがちだが、非常に重要なこの原則を再認識し、成果に直結する具体的な手法を学べたことは、本講座の大きな魅力の一つである。

モンゴル・日本センターの「ビジネス通常コース」は、実用的かつ実践的で、非常に明確な指針を与えてくれる。私のキャリア形成や問題解決における時間短縮において、計り知れない支えとなった。この講座の最大のメリットは、日本のビジネス現場で実際に起きた課題解決の経験に基づいて教えられる点にある。また、30 年～45 年という豊かな経験を持つ日本人講師の方々から直接指導を受け、経営層が知るべき知識を各分野にわたって深く学べることも大きな強みである。

以上の理由から、私はこの講座を次世代のリーダーや学ぶ意欲のある方々に、自信を持って心からお勧めする。

S. Evshinkhorloo Bozzolo アパレルデパート CEO



II. ビジネス交流課





I. 2025 年 モンゴル・日本ビジネス交流促進事業全般

モンゴル・日本センタービジネス交流課は、2025 年にモンゴル・日本両国のビジネス協力を促進する活動を拡大し、多くのプロジェクトの実施に携わった。

モンゴル・日本センターにおけるビジネス交流促進事業は、本年で9年目を迎え、2024年、正式に「ビジネス交流課」として組織を拡充し、体制の安定化を図った。

また、モンゴル・日本両国間のビジネス連携は一層活発化し、年間合計27件の事業を成功裏に実施した。

両国間のビジネスおよび人的交流は着実に発展しており、今後さらなる拡大が見込まれる。それに伴い、他国の日本センターとの連携強化を進めるとともに、日本のみならず、他国との協力機会も拡大していく方針である。

本年は、日本側においてモンゴルのビジネスおよび文化に関心を持つ企業の来訪が、前年と比較して増加した。これはモンゴル・日本センタービジネス交流課の活動規模の拡大を示すものである。

その一例として、JICA モンゴル事務所およびウランバートル市ビジネス・イノベーション局と連携し、日本モンゴルビジネスイノベーションフォーラムを共催した。

さらに、モンゴル・日本センターのビジネスコース修了生を対象とした新たな取り組みとして、東京都において展示会を視察するビジネス研修ツアーを実施した。また、モンゴルと日本の二国間関係にとどまらず、同様の事業を展開している第三国、具体的にはキルギス、カザフスタン、ウズベキスタンの各国日本センターの活動を視察し、修了企業との連携の基盤づくりを開始した。

これらの事業の成果として、両国の企業間における経済・ビジネス環境に関する情報交換の機会が拡大した。日本製品およびサービスのモンゴル市場への導入促進、ならびにモンゴルのビジネス環境や投資機会に関する情報を海外市場へ段階的に発信することで、今後さらなるビジネス機会の創出と協力関係の深化が期待される。



下記の表には、本年に実施した全事業を掲載している。

No.	事業名		期間	回数
1	JICA 関連事業	日本・モンゴルビジネスイノベーションフォーラム	2025.08	1 回
2	JICA 関連事業 (無料)	“Foodex 2025 EXPO” 出展企業支援事業/7社/	2025.03	1 回
3		“Foodex 2025 EXPO”出展及び視察を目的とするビジネスコース修了生向けの特別研修	2025.03	1 回
4	対外関連事業 中央アジア 3 ヶ国日本 センターとの 連携	MOU 締結、意見交換、各日本センターのビジネスコース修了生のネットワーク強化	2025.02	1 回
5	(無料)	キルギス・日本センターの修了生、中央アジアビジネス協会の会長がモンゴルを訪問	2025.04	1 回
6	民間連携事業	静岡県 有限会社小沢テント (農産品の貯蔵倉庫展開における 事前調査事業)	2025.04-10	5 回
7	ビジネス交流支援 セミナー	ビジネスコース修了生向け特別イベント	2025.02.07	1 回
8		「日本の食品物流について」公開セミナー	2025.04.05	1 回 (40)
9		「生産現場の人事マネジメント」公開セミナー	2025.08.22	1 回 (37)
10		「ビジネスと人権」公開セミナー	2025.08.28	1 回 (21)
11		「モンゴル国家 2026 年の予算計画について」公開セミナー	2025.10.31	1 回 (16)



12	本邦研修	“Fashion World Tokyo” 本邦研修	2025.09.30-10.05	1 回
13		新潟県対外技術交流協会本邦研修	2025.11.04-10	1 回
14	マッチング事業	Broadmedia Corporation	2025.07	1 回
15		Lifetronic LLC	2025.07	1 回
16	その他受託事業	日本商工会委託業務	2025.01-12	10 回
17		本邦研修資料翻訳	2025.02, 09	2 回
18		在モンゴル日本大使館、OKA & BAYAR 法律事務所（モンゴル法律セミナー）	2025.03-11	5 回
19		品川区イベント	2025.05	1 回
20		株式会社 KMC イベント	2025.06	1 回
21		STV テレビ局モンゴル遊牧民取材事業	2025.09	1 回
22		新潟県対外技術交流協会代表モンゴル訪問	2025.08	1 回
23		東洋大学インターン生受け入れ	2025.08	1 回
24		日立地区産業支援センター	2025.06.16-18	1 回
25		神奈川県雇用労政課	2025.06.02-04 2025.11.05-07	2 回



26	ジャパンフェスティバル in Mongolia 2025	2025.08.16- 17	1回
27	北海道中標津町タウンプロモーション In モンゴル	2025.10.07	1回

モンゴル・日本センターが有料で提供しているビジネス連携支援サービスの件数は、年々増加傾向している。これは、ビジネス連携支援活動を継続的に実施するとともに、広報・周知活動の強化およびサービスの質の向上に重点的に取り組んできた成果によるものである。

今後のビジネス連携支援事業においては、日本・モンゴル間のビジネス協力が継続的に創出される環境の整備を進めていく。政府間プロジェクトにとどまらず、民間企業間の連携強化を図り、事業運営のさらなる安定化を目指す。また、他国の日本センターとの共同事業の実施も計画している。



II.コラム

1) モンゴル・日本ビジネスイノベーションフォーラム 2025

①フォーラム概要

2025年8月18日、モンゴル国商工会議所において「日本・モンゴルビジネスイノベーションフォーラム 2025」を開催した。本フォーラムは「共に創る未来」をテーマに、日本とモンゴル両国の官民関係者、企業、スタートアップ支援機関が一堂に会し、実践的なビジネス連携と新たな価値創出を目的として実施したものである。

当日は、モンゴル側約380名、日本側約100名、合計480名以上が来場し、大規模の開催となった。フォーラム準備は2025年6月より開始し、JICAモンゴル事務所を中心に定例会議を重ねながら、内容・運営の両面で入念な調整を行った。

②プログラムと主な内容

本フォーラムでは、投資環境、ICT、スタートアップ・イノベーション、金融・OTC市場、モンゴルビジネス人材育成、日本の地方自治体の取り組み、食料・農牧業の7分野のセッションが行われ、計22名の登壇者が講演を行った。



写真 21. フォーラム会場全景

また、「日モ企業の協力による第三国市場への展開の可能性」「OTC市場の将来展望」「人事管理と多様性」をテーマとしたパネルディスカッションでは、日モ双方の視点から具体的かつ実践的な議論が交わされた。来賓として、モンゴル国第一副首相兼経済・開発大臣、駐モンゴル日本国大使を

はじめとする政財界の要人が出席したことから、本フォーラムの意義と期待の高さが示された。



写真 22. パネルディスカッション

③ビジネスマッチングと具体的成果

本年の大きな特徴の一つとして、日モ企業間の実務的な交流を促進するビジネスマッチング（ポスターセッション）の実施が挙げられる。日本企業 6 社、モンゴル企業 19 社、計 25 社が参加し、製品・サービス紹介を通じて活発な意見交換を行った。

フォーラム後のアンケートによると、日本企業の多くはモンゴル企業との新たな接点を得られたという実績について回答している。協業に向けた第一歩となる場を提供できた点は、本フォーラムの重要な成果の一つである。

また、登壇セッションでは、1990 年以降の日本からモンゴルへの累積投資額が約 17 億米ドルに達し、その約 60%が 2016 年の経済連携協定発効以降に行われたことが紹介された。さらに、モンゴル発スタートアップである AND Global 社が企業評価額 1 億米ドルを超えたことを本フォーラムの場で発表するなど、象徴的な成果も共有された。

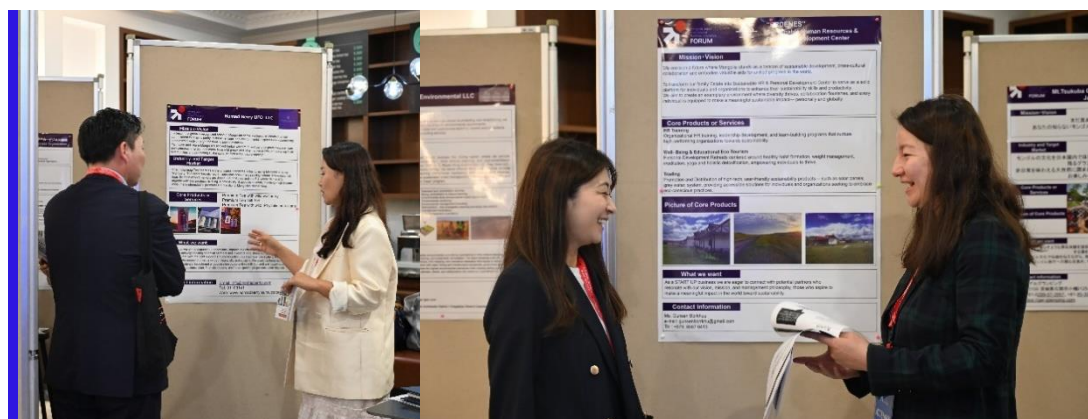


写真 23. ポスターセッション



④広報活動と今後への展望

フォーラムに向けては、ソーシャルメディア、パンフレット、プレスリリース、テレビ報道など多様な媒体を活用した広報活動を展開し、日モビジネス協力の動きを国内外へ広く発信した。

本フォーラムは、単なる情報共有にとどまらず、具体的な連携や協業の芽を育てる「実践的な対話と出会いの場」として機能した。今後は、ネットワーキング機会のさらなる充実やプログラム構成の精緻化を図りながら、日モ両国の持続的な経済連携を支える基盤として、継続的な発展が期待される。

2) モンゴル・日本センタービジネスコース修了生向けイベント

モンゴル国内において 20 年以上にわたり国際機関および民間企業での実務経験を有するモンゴル・日本人材開発センターの JICA 専門家の中村功（なかむら こう）氏が、モンゴル・日本センターのビジネスコース歴代修了生を対象に、これまでの経験をもとに講演を行った。本講演では、モンゴルと日本のビジネス協力の可能性や課題、解決策について、自身の実体験を交えながら共有した。



写真 24. モンゴル・日本センター所長より、修了生に向けて同センターの今後の戦略について説明

本講演では、「両国間に十分なビジネス機会が存在する一方で、異なる民族・異文化を理解することの重要性」が強調された。また、その理解を「意識している場合」と「無意識の場合」とでは、ビジネスの成果に大きな差が生まれることについても具体例を通して紹介された。

特に、オランダの社会心理学者である Geert Hofstede 氏の提唱する The 6-D Model of National Culture の理論を用いて文化の違いを分析した点は、参加者にとって非常に興味深く、有益な内容となった。

本講演のメッセージは、「ビジネスとは“関係・尊重・人”を基盤として成り立つものである。だからこそ、今後も互いを尊重し合いながら歩んでいきましょう」



というものだった。この言葉は、モンゴル・日本センタービジネス研修修了生が今後も大切にしていけるべき価値観であると考えている。



写真 25. 中村功専門家による講演

本講演は、歴代修了生同士のネットワーク強化を目的とした取り組みの第一歩となった。今後もこのような交流・学習の機会を継続的に開催していく予定である。

3)中央アジア3カ国の日本センター訪問

Ts.ダワードルジ所長をはじめとするモンゴル・日本センター訪問団は、2025年2月16日～23日の1週間にわたり、中央アジア3カ国の日本センターを訪問した。

2月16日～18日にカザフスタン・アルマトイ市のカザフ・日本センター、18日～20日にキルギス・ビシュケク市のキルギス・日本センター、20日～22日にウズベキスタン・タシュケント市のウズベク・日本センターをそれぞれ訪問し、関係責任者との意見交換を行った。

カザフ・日本センターはモンゴル・日本センターと同様に2002年から、キルギス・日本センターは1995年から、ウズベク・日本センターは2000年から、それぞれ活動を行っている。

訪問の目的

今回の出張の主な目的は、日本センター間の経験の共有、今後の協力の可能性の検討・提案だった。

それぞれの会合では以下のような協力案について意見交換を行った。

- 共同研修・セミナーの開催
- 教員および職員の相互派遣による経験交流
- 各センターのビジネス研修修了企業同士のマッチング
- ビジネス研修修了生ネットワーク（同窓会組織）の設立
- 経験共有を目的としたビジネス視察ツアーの実施



カザフスタンでの活動

カザフ・日本センターのビジネス研修修了企業である液体食品メーカー「ガランズ・ボトラーズ」を訪問し、カイゼンおよび5Sの実践状況を視察した。

また、カザフスタンで事業を展開する日本投資企業「アズマ・ユニユ」の代表者と面会し、同国のビジネス環境について意見交換を行った。さらに、カザフ・日本センターと「協力覚書（MOU）」を締結した。



写真 26. カザフ・日本センターでの記念撮影

写真 27. カザフ・日本センターとのMOU締結

キルギスでの活動



キルギス・日本センターとの会合後、同センターの修了企業である紙巻きたばこ製造会社の代表者、および中央アジアビジネス協会理事長と面会した。

キルギス企業がモンゴルのどの産業分野との協力を希望しているかについて意見交換を行った。

写真 28. キルギス・日本センター所長との記念撮影

ウズベキスタンでの活動

ウズベク・日本センターの活動を視察し、運営責任者と意見交換を行った後、ビジネス研修修了企業2社を訪問した。



写真 29. ウズベキスタン・日本センター関係者との記念撮影

1 社目はケーキ・スイーツ製造企業「サフィア」で、24 時間稼働の大量生産体制においてカイゼンおよび 5S をどのように効果的に実践しているかについて説明を受けた。

2 社目は中央アジア市場向けに衛生用品を製造・供給する「サンライト・グループ」で、完全自動化された 24 時間

生産体制の運営ポイントや、持続可能な開発目標（SDGs）の社内実践状況について視察した。今回の訪問を通じて、モンゴル・日本センターは各国の日本センターとの協力をさらに強化し、利用者のニーズに応え、時代に即した研修・活動を提供していくことを目指す。

下記リンクより、各国の日本センター、本コラムでご紹介した各国の修了企業のウェブサイトをご覧いただける。

カザフ・日本センター

<https://kjc.kz/ja/about/>

キルギス・日本センター

<https://krjc.kg/>

ウズベク・日本センター

<https://ujc.uz/>

4) モンゴル国の「ものづくり技術の底上げ」に係わるテーマで訪日研修

モンゴル日本センターは、新潟県対外科学技術交流協会と協力し、モンゴル国の「ものづくり技術の底上げ」をテーマとした訪日研修を共同開催するための 3 年間の協定を締結した。この協定に基づき、2025 年 11 月 4 日から 10 日までの間、食品産業に従事するモンゴル。日本センター「通常コース」修了企業 2 社の各代表者、および弊センタービジネス交流課職員 1 名の計 3 名が、新潟県の企業を訪問し、その活動を視察するとともに、経験を共有した。



表-2: 「ものづくり技術の底上げ」訪日研修 参加者リスト

No.	名前	職種	企業名
1	G.Uyanga	ビジネス交流課職員	モンゴル・日本センター
2	G.Oyun	工場長	Jur Ur 社
3	B.Ulziibayar	社長	Nice bakery 社

研修準備の初期段階から研修日程の作成に至るまで、モンゴル・日本センターと新潟県対外科学技術交流協会は綿密に協力して行った。事前に参加企業のニーズを調査し、これに基づき、訪問先の企業・研修機関、指導を担当する専門家などの内容を設定したことが、研修の成果につながる要因となった。

研修期間中、参加者は日本企業の運営方法を学ぶだけでなく、日本文化や日本式マネジメント手法を直接体験し、自社に応用できる多くのアイデアを得ることができた。研修は、大きな成果を上げたプログラムとして成功裏に終了した。



写真 30. 「株式会社栗山米菓：ばかうけファクトリー」訪問

写真 31. 「New Masuya」ベーカリー訪問、会談

この研修は協定期間中、2026 年も実施される予定であり、今後も研修プログラムや内容を継続的に改善し、実践的な成果を生み出す研修となるよう計画的に取り組んでいく。



Ⅲ. 日本語課





I. 2025 年日本語課全般

モンゴル・日本センターの日本語課では、2012 年 4 月より JF 日本語教育スタンダード（以下、JF スタンダード）に準拠した日本語講座を春期、夏期、秋期に実施している。また、日本語レベル確認テスト、スタディツアー、モンゴル・日本文化体験教室など多様な事業も企画・実施している。

さらに 2025 年は 7 月の天皇皇后両陛下のモンゴル御訪問に合わせ、「モンゴル・日本友好親善記念 2025 年日本語多読本作成コンテスト」を初開催した。

上記事業に加え、様々な受託事業も行っている。2025 年は「特定技能」関連事業、「モンゴル JDS 来日準備日本語コース」、「JICA インターンシッププログラム参加希望者対象の事前日本語研修」などを引き続き実施した。

1. 日本語講座の概要

日本語講座の大部分は JF スタンダードに則して実施している。本報告書は 2025 年 2 月～5 月の春期コース、5 月～7 月の夏期（前半）コース、7 月～8 月の夏期（後半）コース、9 月～12 月の秋期コース（2025 年 1 月終了）の実績報告となる。

春期コースと秋期コースでは、レベル別の「総合日本語コース」、「（11 歳～13 歳）子ども向けまるごとコース」、日本語教師向けの「日本語教育講座」を実施している。それぞれの内容および実績の詳細については次表をご参照いただきたい。「総合日本語コース」は期間が約 4 か月で、入門（A1）レベルの「総合日本語 1 コース」から中級（B1）レベルの「総合日本語 6 コース」まで設けている。2025 年の「日本語教育講座」は春期・秋期ともに「JF 日本語教育スタンダードを活かした初級日本語の教え方」というテーマで実施した。夏期（前半・後半）コースでは「ゼロ初級コース」を 4 クラス、「（8 歳～10 歳）子ども向け日本語講座」を 1 クラス実施した。

それ以外の講座としては、前年に引き続き、春期に「日本語観光ガイド養成実践講座」（全 15 回、計 38 時間）を、夏期に「日本語授業用 PPT 作成講座」を、秋期に中上級日本語学習者向けの「仕事に役立つ実践日本語講座」をそれぞれ実施した。



2. 共催事業について（シンポジウム、スピーチコンテスト、日本語教育研究会）

2025年の共催事業として、3月にモンゴル日本語教師会主催・国際交流基金共催の「第16回日本語教育シンポジウム」を開催した。11月には「第31回学校対抗日本語スピーチコンテスト」を在モンゴル日本国大使館、モンゴル日本語教師会、モンゴル国立科学技術大学外国語学部、国際交流基金とともに開催した。また、「日本語教育研究会」など、多くの事業・イベントを関係機関と緊密に連携して実施した。

3. 第16回日本語教育シンポジウム

2025年3月16日（日）にモンゴル日本語教師会主催、モンゴル・日本センター、国際交流基金共催、在モンゴル日本国大使館後援で、「第16回日本語教育シンポジウム」を開催した。基調講演のテーマは「日本語教育における漢字指導—最新のアプローチ」、午後のワークショップのテーマは「認知の観点から考える新しい漢字学習—創ってみよう、発見型漢字教材」である。講師は早川杏子（はやかわきょうこ）氏（一橋大学准教授）で、モンゴルの日本語教師に新しい知見をもたらすとともに、新しい気づきにつながる充実したシンポジウムとなった。また、地方の教育機関の日本語教師には、モンゴル日本語教師会が交通費（バス代・自動車代）を全額補助した。

4. 第31回学校対抗日本語スピーチコンテスト

2025年11月15日（日）に「第31回学校対抗日本語スピーチコンテスト」の本選を開催した。このコンテストは在モンゴル日本国大使館、モンゴル日本語教師会、モンゴル国立科学技術大学、国際交流基金、モンゴル・日本センターの共催で行われ、NGO法人在モンゴル日本人会、NGO法人モンゴル日本商工会が後援した。

2回の予選を経て、本選には「高校の部」10校10名、「大学の部」7校7名が出場し、「モンゴル人のいいところ」（高校の部）、「日本語を学ぶとは」（大学の部）というテーマでスピーチをした。高校の部と大学の部の入賞者それぞれ4名には、在モンゴル日本国大使館からJENESYS（対日理解促進交流プログラム）に参加する権利が贈られた。



アンケートでは、出場者から「モンゴル人として、日本の方々に『モンゴル人とはこういう人たちです』と伝えられたのがとても良かった。」「とても良かった。日本語を学んで良かったと改めて思い、自分のことを誇りに思った。」などの感想が寄せられた。また、関係者からは「モンゴル人の良いところを日本の方々に伝える良い機会となり、とても素晴らしかった。」「日本語を学ぶ良さや美しい面を聞き、日本語を学ぶ意義をより理解できた気がする。」などの声が寄せられた。

「日本語教育研究会」

日本語教育研究会はモンゴル日本語教師会と共催で、夏期休暇期間などを除いて、毎月第3土曜日 10:30~12:30 に実施している。2025 年は8回実施し、モンゴルの日本語教師の知識やスキルの向上に資する発表や、日本語教育関連情報の共有などが行われ、機関を越えた学びと交流の場となった。



2025 年日本語課活動実績

表-3：春期コース、夏期コース、秋期コース

※出典：モンゴル・日本センター日本語コース実績

No.	講座名	時間数 実施回数	内容	講師	受講 者数
1	(8～10 歳) 子 ども向け日本語 講座	各 20 回 30 時間 実施 1 回	日本語を楽しく学び始めたい、もしくはひらがな・カタカナを学んでも補習が必要な 8～10 歳の子ども向けコース。あいさつ、自己紹介、家族、好きな食べ物・飲み物、好きなもの、私の体、誕生日、趣味、私の 1 日、休みの日といったテーマで自分のことが言えるようになる。ひらがなが読める、書けるようになる。また、カタカナで自分の名前と国を読める、書けるようになる。	P.マラル、B.ブマンツェツェグ、井駒かおる	12
2	(11～13 歳) 子 ども向けまるごと コース (A1 レ ベル)	各 26 回 52.5 時間 実施 2 回	日本語をまったく学んだことがない 11～13 歳の子ども向けのコースで、JFS 準拠教科書『まるごと入門 A1 活動』を使ってリスニング、会話、文法、読み書きを学ぶ。	P.マラル、E.ポロルスブド、栗山知之	23
3	ゼロ初級コース (A1 レベル)	各 30 回 67.5 時間 実施 4 回	日本語をまったく学んだことがない人のためのコースで、JFS 準拠教科書『まるごと入門 A1 理解』を使ってリスニング、会話、文法、読み書きを学ぶ。	D.ゾルザヤ、D.ツァツラル、D.ムンフトヤ、O.ブルガン、B.ブマンツェツェグ、井駒かおる、栗山知之	68
4	総合日本語 1 (A1 レベル)	各 42 回 84 時間 実施 5 回	日本語を初めて学ぶ人を対象とし、聴解、会話、読み、書きの 4 技能をすべて学ぶ総合的なコース。	D.ゾルザヤ、D.ツァツラル、S.アマルバヤスガラン、O.ブルガン、B.ブマンツェツェグ、井駒かおる、栗山知之	110
5	総合日本語 2 (A2 前半レベ ル)	各 42 回 84 時間 実施 4 回	A1 レベルの学習を対象とし、A2 前半レベルを目標とする。聴解、会話、読み、書きの 4 技能をすべて学ぶ総合的なコース。	D.ムンフトヤ、O.ブルガン、B.ブマンツェツェグ、Ts.オノン、栗山知之	77
6	総合日本語 3 (A2 中間レベ ル)	各 42 回 84 時間 実施 3 回	A2 前半レベルの学習者を対象とし、A2 中間レベルを目標とする。聴解、会話、読み、書きの 4 技能をすべて学ぶ総合的なコース。	D.ゾルザヤ、P.アルタンブラグ、O.ブルガン、P.マラル、栗山知之	44
7	総合日本語 4 (A2 後半～B1 初めのレベル)	各 31 回 62 時間 実施 2 回	A2 後半レベルの学習者を対象とし、B1 初めのレベルを目標とする。聴解、会話、	P.マラル、P.アルタンブラグ、鶴田靖行、富岡史子、井駒かおる	37



			読み、書きの4技能をすべて学ぶ総合的なコース。		
8	総合日本語5 (B1レベル)	各30回60時間 実施2回	B1初めのレベルの学習者を対象とし、B1後半レベルを目標とする。聴解、会話、読み、書きの4技能をすべて学ぶ総合的なコース。	Ts.オノン、P.マラル、栗山知之	23
9	総合日本語6 (B1レベル)	各29回58時間 実施1回	B1後半のレベルの学習者を対象とし、B2初めのレベルを目標とする。聴解、会話、読み、書きの4技能をすべて学ぶ総合的なコース。	Ts.オノン、富岡史子	13
10	仕事に役立つ実践日本語講座 2025	各11回22時間 実施1回	中上級日本語学習者の実社会での日本語使用場面を想定し、仕事で日本人との対人関係を維持できる程度に適切に、電話、文書、メールで明確に内容を伝えながらやり取りできるようになることが目標。スピーキング、ライティング、プレゼンテーションの3分野に分けて指導。	E.エルデネツェツェグ、井駒かおる	15
11	日本語観光ガイド養成実践講座 2025	各15回38時間 実施1回	日本語ガイドを目指す方が対象。ガイド実務のノウハウ、マナー、身だしなみ、知っておくべき日本語の表現等を理解・実践できるようになることが目的。講義や経験談、ペアワークやグループディスカッション、観光ガイドとしての実習等を組み合わせたコース。	O.ブルガン、E.エルデネツェツェグ、B.ブマンツェツェグ ゲスト講師： B.バトムフ、B.ドラムスレン（モンゴルプロフェッショナル観光ガイド協会）、B.ガントルガ（モンゴル赤十字社）	28
12	日本語教育講座 (B2～C1レベル)	1) 各8回16時間 実施1回 2) 各13回26時間 実施1回	1) 第2言語習得理論・JF日本語教育スタンダードに基づく初級レベルの「話す」授業の基本的な教え方を知る。 2) 初級日本語の教案が作成でき、それを元に模擬授業が行えることを目指す。	富岡史子、S.アマルバヤスガラン	23
13	日本語授業用PPT作成講座	6回18時間 実施1回	日本語の授業で使うPPTの基本、テーマ別授業（会話、文法、文字語彙）におけるPPT教材の作り方を理解することが目標。さらに受講生による成果発表を行う。	栗山知之	6
					479



表-4：2025年特別講座&事業

No.	講座・事業名	時間数 実施回数	内容	講師、担当者等	受講者数 参加者数
1	初中等日本語教員教授法研修会 2025 ※モンゴル日本語教師会による受講者支援	3日 10.5時間 実施1回	初中等教員に向けて日本語教授法研修を行い、モンゴル全土における日本語教育の振興及び質の向上に資するとともに、初中等教員コミュニティの強化を図る。テーマ：「初級レベルの読解指導と評価」。	講師：鶴田靖行 運営：P.マラル、D.ツァツラル	40
2	モンゴル JDS 来日準備日本語講座 2025 ※受託講座	32回 65時間 実施1回	JDS 留学生の中で日本語を全く学んだことがない方のためのコース。JFS 準拠教科書『いろいろ生活の日本語』（入門 A1 レベル）を使ってリスニング、会話、文法、読み書きを学ぶ。	D.ムンフトヤ、D.ゾルザヤ、栗山知之	13
3	JICA インターンシッププログラム参加希望者対象の事前日本語研修（夏コース）※受託研修	48回 150時間 実施1回	JLPT N3 相当レベル以上、かつ日本でのインターンシップ参加に必要な日本語能力を習得することを目指す。	S.アマルバヤスガラン、D.ムンフトヤ、P.マラル、栗山知之	28
4	JICA インターンシッププログラム参加希望者対象の事前日本語研修（冬コース）※受託研修	各 47回 164時間 実施1回	JLPT N3 相当レベル以上、かつ日本でのインターンシップ参加に必要な日本語能力を習得することを目指す。	S.アマルバヤスガラン、P.マラル、Ts.オノン、栗山知之	18
5	JICA インターンシッププログラム参加希望者対象の事前日本語研修 プレースメントテスト（筆記テスト、面接）	各 6時間 実施2回	N4 レベル確認テスト、日本語口頭能力テスト、学習意欲確認。	E.エルデネツェツェグ、S.アマルバヤスガラン、D.ムンフトヤ、P.マラル、D.ツァツラル	68
6	JICA インターンシッププログラム参加希望者に対する事前日本語研修 面接練習会	各 2時間 実施2回	日本人による模擬面接、面接後のフィードバック。	面接官：佐藤睦、松井幸江、富岡史子、石橋かつゆき	49
7	JICA インターンシッププログラム参加希望者に対する事前日本語研修 インターンシップ受入企業向け公開授業及びセンター事業紹介	各 2.5時間 実施2回	インターンシップ受入自治体・企業の関係者が対象。「話す」活動を中心とした授業の見学、モンゴル・日本センター事業紹介。	公開授業：S.アマルバヤスガラン センター事業紹介：Kh.ガルマーバザル、E.エルデネツェツェグ	90
8	JICA インターンシッププログラム参加希望者に対する事前日本語研修 モンゴル・日本センター1日就業体験	各 8時間 実施2回	モンゴル・日本センター各課に配属、1日の業務を体験。	E.エルデネツェツェグ、S.アマルバヤスガラン、ブマンツェツェグ	39
9	日本文化体験会—書道	2時間 実施1回	書道の基本技術や歴史を学び、正しい筆使いを習得するとともに、オリジナル作品の制作を通じて集中力と	P.マラル、B.ブマンツェツェグ	13



			表現力を高め、書道の楽しさを実感する。		
10	日本文化体験会—ゼリーキャンドル	2時間 実施1回	日本のリメイク文化並びにゼリーキャンドルの歴史及び現状を紹介するとともに、オリジナルのゼリーキャンドルを製作することで、リメイク文化を実際に体験する。	P.マラル、B.ブマンツェツェグ	17
11	日本文化体験会—お守り作り ※Mobicom社の依頼	各2回3時間 実施1回	Japan Festival in Mongolia 2025のMobicom社のブースにおいて、日本文化体験活動の一環として「お守り作り」体験を提供。	B.ブマンツェツェグ、P.マラル、S.アマルバヤスガラン	140
12	モンゴル文化体験会—モンゴル縦文字書道	各2.5時間 実施1回	チンギス・ハーン誕生記念日&モンゴル誇りデー特別企画として、モンゴル書道の起源及び書法について理解を深めるとともに、モンゴル縦文字書道による作品制作を行い、完成作品を持ち帰る。	ゲスト講師：書道家E.アンフバヤル (Bichig soyol center) 通訳&運営：P.アルタンブラグ、T.ボロルマー	11
13	文化学園大学杉並中学・高等学校の生徒たちのモンゴル・日本センター訪問 ※Lets Travel社の依頼	1時間 実施1回	「海外で働く日本人のリアル」をテーマとしたオーブندیスカッション	松尾文、佐藤睦、富岡史子、栗山知之、井駒かおる、B.ブマンツェツェグ、E.テンギス、D.ムンフトヤ	61
14	春の留学フェア2025でのブース出展	7時間 実施1回	モンゴル・日本センター夏期・秋期日本語コース、JFT-Basicテストの広報、公的日本語試験の紹介など。	E.エルデネツェツェグ、P.アルタンブラグ	51
15	Japan Rice Festival-2025でのブース出展 ※MJ Partners社の依頼	2日16時間 実施1回	モンゴル・日本センターの事業と日本語コースの紹介。秋期の日本語コースの宣伝。	D.ムンフトヤ、P.アルタンブラグ、E.テンギス	365
16	モンゴル・日本人材開発センター日本語レベル確認テスト (N1-N5レベル)	実施14回	日本語能力試験 (JLPT) N1-N5レベル相当の問題 (模擬テスト)。言語知識 (文字・語彙)、言語知識 (文法)・読解、聴解。	D.ムンフトヤ、S.アマルバヤスガラン、P.マラル、O.ブルガン、B.ブマンツェツェグ、E.ボロルスブド	220
17	モンゴル・日本人材開発センター日本語レベル確認テスト (N3-N5レベル) ※イフザサグ大学、ロガリフム学校、モンゴル医科大学、JLA教育センター、JALエンジニアリング社の依頼	実施8回	日本語能力試験 (JLPT) N3・N4・N5レベル相当の問題 (模擬テスト)。言語知識 (文字・語彙)、言語知識 (文法)・読解、聴解。	E.エルデネツェツェグ、D.ムンフトヤ、S.アマルバヤスガラン P.マラル、P.アルタンブラグ、O.ブルガン、B.ブマンツェツェグ	213



18	JFT-Basic (国際交流基金日本語基礎テスト) ガイダンスセミナー	2 時間 実施 1 回	JFT-Basic テストの目的、対象、形式、画面イメージ構成、レベルの目安、テスト登録や結果の通知について紹介。サンプル問題の練習、質問応答。『いろどり』オンラインコースの使い方の説明。	P.アルタンブラグ	23
19	「特定技能」制度についての情報交換会 ※主催：モンゴル・日本人材開発センター 共催：国際交流基金、モンゴル労働社会保障省労働福祉サービス (GOLWS)、特定技能試験会場 English Academy of MUST、モンゴル高専カレッジ、渡日前研修担当 GTN MONGOLIA 社	2 時間 実施 1 回	「特定技能」制度に関する正式情報を公的機関代表者が発信。モンゴル国内の理解促進、関連する日本語教育機関の連携強化・事業拡大を目指す。	運営担当：P.アルタンブラグ、E.エルデネツェツェグ、D.ムンフトヤグ	74
20	『いろどり生活の日本語』教科書を使った教授法セミナー	各 5 回 15 時間 実施 2 回	『いろどり生活の日本語』教科書の概要&特徴の紹介、体験授業。受講生による模擬授業とフィードバック。	富岡史子、栗山知之、P.アルタンブラグ	34
21	「いろどり日本語オンラインコース」体験会	各 2 時間 実施 4 回	『いろどり生活の日本語』教科書の普及、JFT-Basic 合格者増加が目的。「いろどりオンラインコース」の概要&使い方を説明。入門編第 3 課を実際に体験。	P.アルタンブラグ	83
22	ダルハン市における日本語教育支援事業 ※「特定技能」関連事業	2 日 16 時間 実施 1 回	ダルハン市日本語教育機関訪問、日本語教師との意見交換。『いろどり生活の日本語』教科書を使った教授法セミナー、Japan Discovery Day イベントの実施。	富岡史子、E.エルデネツェツェグ、P.アルタンブラグ、T.ボロルマー、B.ウーガンバヤル	163
23	JF 公募プログラム説明会 ※国際交流基金、在モンゴル日本国大使館との共催事業	2.5 時間 実施 1 回	特定技能制度、モンゴル・日本センター特定技能関連日本語事業、JF 公募プログラム「生活・就労のための日本語教育機関支援 (助成)」「海外日本語教師研修」の概要、申請方法、採用者の声を紹介。	P.アルタンブラグ (モンゴル・日本センター)、片山克人 (JF)、森山賢美 (在モンゴル日本国大使館)、M.デルゲルマー (ミカモンゴル教育センター)	80
24	日本語教育機関コンサルティング活動及び日本語教育相談 ※GTN MONGOLIA 社、アルハンガイ県ツアガンオール語学センター、ダルハン・ウール県ダルハン日本セ	各 1 時間 実施 4 回	教科書選択、カリキュラム作成、文字の教え方、テスト作成と評価の仕方、子供向けの教え方についてアドバイス。	鶴田靖行、富岡史子、P.アルタンブラグ、E.エルデネツェツェグ	4



	ンター、ダルハンいろは日本語センター)				
25	「モンゴル・日本友好親善記念 2025 年モンゴル日本語多読本作成コンテスト」審査	3 時間 実施 1 回	モンゴルにおける日本語教育をより一層促進するとともに、モンゴルの実情に即した日本語教材の充実を図るため、日本語多読本を募集。チームの部、個人の部の入賞作品を審査・決定。	審査員：E.バトジャルガル、Ts.オノン、Mari.M、富岡史子、栗山知之	24
26	「モンゴル・日本友好親善記念 2025 年モンゴル日本語多読本作成コンテスト」表彰式	1 時間 実施 1 回	同コンテストのチーム及び個人の各部門の 1~3 位、特別賞を授与。	運営担当：富岡史子、栗山知之、B.ブマンツェツェグ、O.ブルガン、S.アマルバヤスガラン	43
27	日本語コース運営会議	各 2 時間 実施 3 回	2024 年秋期、2025 年春期、2025 年夏期日本語コースの振り返り、次回コースの日程・講師割の確認など。	司会進行：P.マラル、E.エルデネツェツェグ、B.ブマンツェツェグ 議事録：D.ムンフトヤ、栗山知之、P.マラル 出席者：当該コース担当講師	31
28	2025 年春期、秋期コース実施前プレースメントテスト	各 1.5 時間 実施 8 回	総合 2~6 コースの受講資格確認のためのプレースメントテスト	E.エルデネツェツェグ、D.ムンフトヤ、P.アルタンブラグ、O.ブルガン、D.ツァツラル、E.ボロルスブド	112
29	JF 講座講師研修	各 1.5 時間 実施 8 回	モンゴル・日本センターで JF 講座を担当する全日本語教師が対象。日本語教育や教授法などに関する知識・知見を共有。習得したことを自身の授業・実践に活かす。	富岡史子、B.ブマンツェツェグ	79
					2186

表-5：2025 年共催事業

No.	事業名	時間数 実施回数	内容	発表者/講演者/ 担当者 (敬称略)	参加者数
1	第 16 回日本語教育シンポジウム	6 時間 実施 1 回	基調講演：「日本語教育における漢字指導—最新のアプローチ—」 ワークショップ：「認知の観点から考える新しい漢字学習—創ってみよう、発見型漢字教材—」	早川杏子 (一橋大学国際教育交流センター准教授)	84
2	「第 31 回学校対抗日本語スピーチコンテスト」1 次選考作文原稿審査	4 時間 実施 1 回	1 次選考の原稿審査を行い、高校生 27 名中 18 名、大学生 16 名中 11 名が 2 次選考進出。	実行委員会メンバー	45



3	「第31回学校対抗日本語スピーチコンテスト」2次選考面接審査	3時間 実施1回	1次選考を勝ち抜いた高校生18名、大学生11名が参加。高校生10名、大学生7名が本選進出。	実行委員会メンバー	29
4	「第31回学校対抗日本語スピーチコンテスト」本選リハーサル	2時間 実施1回	本選前のリハーサル	実行委員会メンバー	17
5	「第31回学校対抗日本語スピーチコンテスト」本選 共催：在モンゴル日本国大使館、モンゴル日本語教師会、モンゴル国立科学技術大学、モンゴル・日本人材開発センター、独立行政法人国際交流基金 協賛：在モンゴル日本人会、モンゴル日本商工会	4.5時間 実施1回	予選を勝ち残った高校生10名、大学生7名がスピーチを披露。 テーマ：高校の部「モンゴル人の良いところ」、大学の部「日本語を学ぶとは」	実行委員会メンバー	106
6	第128回日本語教育研究会 共催：モンゴル日本語教師会	2時間 実施1回	発表テーマ： ①「メルゲド学校における日本語能力試験のための補習」 ②「日本語教科書の依頼場面に見られる配属表現とモンゴル人学習者の課題」	発表者： ①D.ドラムスレン（ウブスハンガイ県メルゲド学校） ②浅井裕理（新モンゴル工科大学・友ランゲージウランバートル校）	23
7	第129回日本語教育研究会 共催：モンゴル日本語教師会	2時間 実施1回	発表テーマ： 「国際交流基金（JF）日本語専門家の活動報（2022-2025年）」	発表者： 鶴田靖行（国際交流基金）	19
8	第130回日本語教育研究会 共催：モンゴル日本語教師会	2時間 実施1回	発表テーマ： ①「2024年度JF研修を通じて学んだ日本語教師の社会との関わりと生成AIの活用」 ②「白川静漢字教育賞の概要と受賞について」	発表者： ①B.ブマンツェツェグ（モンゴル・日本センター） ②B.ウーリーントヤ（ホビー学校）	13
9	第131回日本語教育研究会 共催：モンゴル日本語教師会	2時間 実施1回	発表テーマ： 「教師会の1年間の活動報告」（日本語教師会2024～2025年度年間報告＆質疑応答）	発表者： E.バトジャルガル（モンゴル日本語教師会）	23
10	第132回日本語教育研究会 共催：モンゴル日本語教師会	2時間 実施1回	発表テーマ： ①「文化をどう教えるかーモンゴル・日本センターでの文化体験授業の実践からー」 ②「漢字の教え方・学び方」	発表者： ①B.ブマンツェツェグ（モンゴル・日本センター） ②じん亭知子（モンゴル国立科学技術大学ツイニングプログラム）	20
11	第133回日本語教育研究会 共催：モンゴル日本語教師会	2時間 実施1回	発表テーマ： 「日本語通訳ガイドの技能評価・基準に関する調査」	発表者： O.ブルガン（モンゴル・日本センター）	21



12	第134回日本語教育研究会 共催：モンゴル日本語教師会	2時間 実施1回	発表テーマ： ①「モンゴル日本青年交流支援センターの「日常」－日本語授業の紹介－ ②「初中級読解・作文授業で活用できる支援ツール」	発表者： ①冷泉弘基（モンゴル日本青年交流支援センター） ②Ts.オノン（モンゴル国立大学）	10
13	第135回日本語教育研究会 共催：モンゴル日本語教師会	2時間 実施1回	発表テーマ： ①「第9回漢字ナーダム報告」 ②「尽きない悩み」	発表者： ①D.ドラムスレン（ウブスハンガイ県メルゲド学校） ②中西令子（モンゴルニ統合学校）	17
					427

表-6：日本語コース受講者数

	2024年	2025年
春期	237	185
夏期	139	86
秋期	228	208
合計	604	479

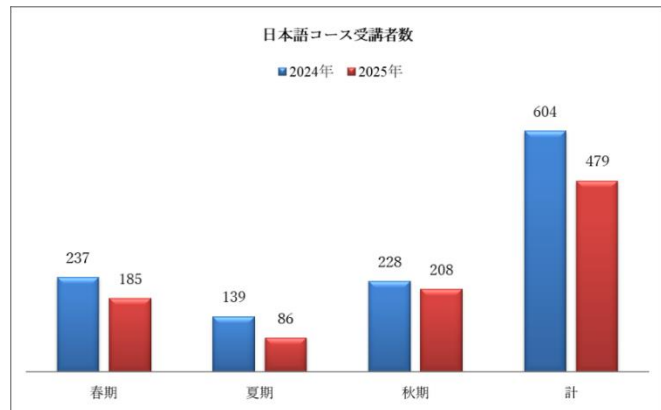


表-7：特別講座参加者数

	2024年	2025年
特別講座	2,691	2,186

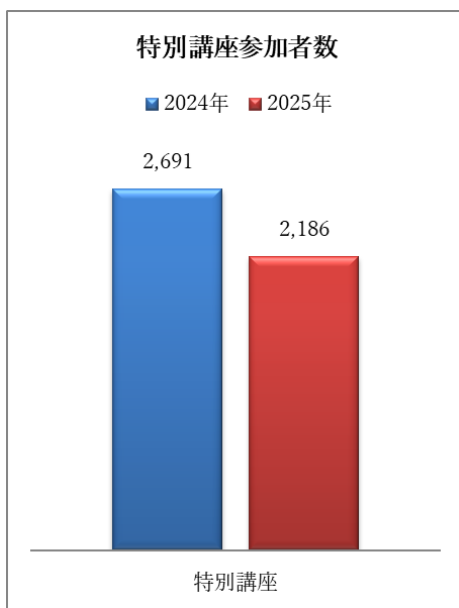
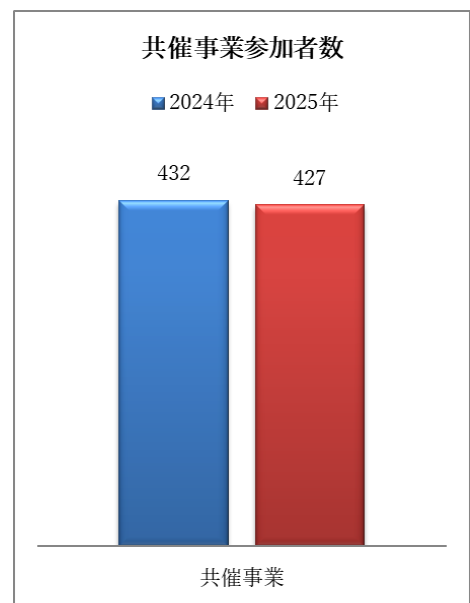


表-8：共催事業参加者数

	2024年	2025年
特別講座	432	427





II. コラム

1) 日本語教授法コースの試み（教育講座、初中等研修、いろどり研修）

モンゴル・日本センターには、日本語教授法コースとして、経験の浅い日本語教師やこれから日本語教師を目指す方を対象とした「日本語教育講座」、2025 年で 7 回目の開催となる「初中等日本語教員教授法研修会」、JF からの特定技能関連受託事業で実施している「『いろどり生活の日本語』教授法セミナー」の 3 コースがある。

これら 3 コースの 2025 年度の試みについては下記の通りである。

A. 日本語教育講座

本講座は年 2 回、春期と秋期に実施している。コースの流れとして、コース前半には JF が推奨している教授法である行動中心アプローチの紹介、それに基づくテキスト『いろどり生活の日本語』の授業体験などがある。コース後半では、受講者が模擬授業を行い、フィードバックを受けながら行動中心アプローチの理解を深めていく。

2025 年の秋期では、試みとしてコース前半に実際に使用する日本語教科書の理解を深めるために、教科書分析の回を設けた。また、模擬授業の前に 10 分程度の部分練習を行った。こうした教科書分析と部分練習は、それぞれ受講者の教材理解と模擬授業準備の一助になった。ただ、今後は受講者のニーズの変化や全体の流れを見ながら微調整していく必要がある。

B. 初中等日本語教員教授法研修会

本研修は、年 1 回、1 月に開催している。今回は受講者の負担を減らすため、前回より 1 日少ない 3 日間の日程で実施した。テーマは「初級レベルの読解指導と評価」であり、初中等日本語教員の勉強会で出席者から募った希望テーマの中から決定した。

本研修はウランバートルと地方の初中等教育機関の日本語教員が一堂に会し、ともに学びを深め、ネットワークを築く貴重な機会となっている。そのため、日本語教育シンポジウム同様、モンゴルの日本語教育にとって不可欠な行事となりつつある。近年はモンゴル日本語教師会からも地方教師の参加に対して援助をいただいております。もはやモンゴル・日本センターだけの研修会ではなくなったと言える。



C. 『いそどろ生活の日本語』教授法セミナー

本セミナーは、就労のための日本語学習を想定したテキスト『いそどろ生活の日本語』の教え方を教えると共に、JFT-Basic（JF 日本語基礎テスト）の周知など、日本への就労促進に貢献することが目的である。セミナーは 5 日間にわたって行い、長年の改善を経て必要な情報を効率よく組み込んだ構成になっている。2024 年までは年 3 回実施してきたが、2025 年は 1 月、9 月の 2 回実施した。特に 9 月のセミナーでは、モンゴル・日本センターの講師が行うモデル授業の内容をよりシンプルなものにし、行動中心アプローチの授業の流れが見えやすいものにした。また、模擬授業をふり返り分析する際に使用する教え方チェックシートを作成し、授業の観察ポイントを分かりやすくした。これらのモデル授業の簡素化と教え方チェックシートの導入によって、初めて『いそどろ生活の日本語』に触れる受講者にテキストの特徴を上手く伝えられた。

モンゴル国内では日本語教授法コースが非常に少なく、誰もが受講可能なコースとしては上記 3 コースが唯一のコースである。日本語教授法コースの実施を通して、モンゴルの日本語教師育成に貢献できれば幸いである。



写真 32. 「いそどろ研修」



写真 33. 「教育講座」



写真 34. 「初中等研修」



2. モンゴル・日本友好親善記念 2025 年モンゴル日本語多読本作成コンテスト

2025 年は、日本の天皇皇后両陛下がモンゴルをご訪問になるとともに、モンゴルにおける日本語教育が 50 周年を迎えた、記念すべき年である。この歴史的な節目を記念し、モンゴル・日本センター、モンゴル日本語教師会、独立行政法人国際交流基金の共催で、「モンゴル・日本友好親善記念 2025 年日本語多読本作成コンテスト」を初めて開催した。本コンテストの目的は、モンゴルにおける日本語教育に関心を持つ方々の意欲の向上であり、さらに、入賞した多読本を広く発信することで、モンゴルにおける日本語教育をより一層促進するとともに、モンゴルに即した日本語教材の充実を図ることである。また、日本語学習者にとっては身につけた日本語能力を創造的に活用し、日本語を通して自らの考え、文化、価値観などを表現する機会でもある。本コンテストには、中高生、大学生、日本語教師など、幅広い層の参加者が積極的に参加し、モンゴルの暮らしや自然、家族、学びの大切さを題材とした多くの素晴らしい作品が寄せられた。審査の結果、以下の作品が入賞作品として選ばれた。



写真 35. 「モンゴル・日本センター、図書館、多読本コーナー」

個人の部

第 1 位: 『私の好きな科目』 ウブスハンガイ県メルゲド学校 生徒 D. マラル

第 2 位: 『モンゴルのゲル』 ウブスハンガイ県メルゲド学校 生徒 Z. エンフデルゲル

第 3 位: 『子どものころの思い出』 Dul Construction LLC 日本語講師 M. チャンツアルドゥラム

特別賞: 『どうぶつえん』 モンゴル民族大学 日本語講師 B. ハリウナ



写真 36. 表彰式「個人の部入賞者」



写真 37. 個人の部 1 位『私の好きな科目』



グループの部

第1位:『フェルトのキツネ』名古屋大学日本法教育研究センター 学生 「星」チーム

第2位:『夜に赤ちゃんとお出かけるとき』ウブスハンガイ県メルゲド学校 生徒・教師 「メルゲド学校-5」チーム

第3位:『みんなが探している物』富山大学 学生 「めぐみ」チーム

特別賞:『遊牧民の一日』ウブスハンガイ県メルゲド学校「メルゲド学校-1」チーム



写真 38. 表彰式「グループの部入賞者」

写真 39. グループの部1位「フェルトのキツネ」

入賞作品はモンゴル内外の日本語教育機関に配布するとともに、インターネットでも公開している。モンゴル・日本センターは、今後も日本語教育と文化交流を通じて、モンゴルと日本の友好関係をさらに強化し、相互理解を深める取り組みを継続していく。

参加者一人ひとりの知恵、そして心を込めて創り上げた素晴らしい作品は、モンゴルだけでなく、世界中の日本語学習者に届き、読む楽しさや学びの喜びを広げるとともに、日本語学習への意欲と希望をさらに高めてくれると信じている。

入賞作品リンク：<https://padlet.com/mongoljapancenter/2025-8e2o0hm1m8svrfuh>

3. モンゴル・日本センターにおける渡日前日本語研修の取り組みと成果

～JICA インターンシッププログラム参加希望者対象の事前日本語研修を事例に～

日本語課では、これまで外部機関からの依頼・要望に応じ、就労・就学など多様な目的に対応した渡日前日本語研修を企画・実施してきた。本稿では、その中でも直近の「JICA インターンシッププログラム参加希望者を対象とした事前日本語研修」を事例として、モンゴル・日本センターにおける渡日前日本語研修の取り組みと成果を紹介する。



2024年から2025年にかけて、JICAによる「モンゴル国実践的教育機会を通じた工学系人材育成に係る情報収集・確認調査」におけるインターンシップ参加希望者を対象とした事前日本語研修を、アジア科学教育経済発展機構からの再委託により受注し、夏コースおよび冬コースの2回にわたり実施した。

夏コースは2024年11月9日から2025年5月31日まで、全48回・計150時間で実施し、28名が参加した。冬コースは2025年6月17日から11月16日まで、全47回・計164時間で実施し、18名が参加した。いずれも半年近くに及ぶ長期研修であったため、受講者が学業と両立できるよう、対面によるメイン授業とオンラインによる復習授業を組み合わせたハイブリッド形式で実施した。

本研修の目標は、JLPT N3相当レベル以上、かつインターンシップ参加に必要な実践的な日本語能力の習得である。主教材には『まるごと日本のことばと文化（初中級A2/B1・中級1/B1）』を使用し、言語活動全般の能力向上を図るとともに、N3対策を並行して行った。さらに、実務能力育成の一環として、グループ発表、インターンシップ応募に必要なエントリーシート作成指導、企業面接対策、模擬面接、モンゴル・日本センター1日就業体験なども取り入れた。



写真 40. 「渡日前日本語研修」



写真 41. 「渡日前日本語研修」

長期研修における最大の課題は受講者のモチベーション維持である。そのため、本研修はモチベーションの維持・向上に重点を置いた計画立案に努めた。また、研修開始時点で受講者の日本語レベルに大きな差があり、全員をN3相当レベルに引き上げることも容易ではなかった。しかし、モンゴル・日本センターの日本語コースの強みである個別対応によるきめ細かなサポート、受講者の学習状況に応じた柔軟



な指導、実績に基づく計画的かつ安定したコース運営により、想定以上の成果を上げることができた。

具体的な成果として、夏コースでは最後まで受講した 22 名全員が N3 相当レベルに到達した。そして、日本国内企業との面接を経て、全員のインターンシップ参加が決定した。インターンシップでは、受講者の日本語能力の高さに加え、業務に対する積極的な姿勢についても、受入企業から高い評価を得た。

冬コースでは研修開始時点で日本語レベルが初級前半の受講者が多かった。しかしながら、最終的にインターンシップで円滑にコミュニケーションが取れる水準まで日本語レベルを上げることができた。モチベーション維持策と学習状況・課題に応じた個別フォローの結果、受講者全員が N3 に近いレベルに到達し、ほぼ全員のインターンシップ参加が決定した。

夏コース・冬コースは、満足度が 96% と非常に高く、計 40 名が日本でのインターンシップに参加し、日本語能力を積極的に活用しながら意欲的に活動を行った。

この研修に加え、日本語課ではこれまで、「技能実習生向け日本語講座（6 回・計 97 名）」、「モンゴル JDS 来日準備日本語講座（5 回・計 70 名）」、「京都大学 iUP プログラム入学予定者のためのプレ日本語講座（5 回・計 5 名）」など、目的別・レベル別の渡日前日本語研修を多数実施してきた。



写真 42. 「渡日前日本語研修」

こうした研修の実施を通して培ってきた、安定した運営体制と経験豊かな講師陣による指導は、受講者および依頼機関の双方から高い評価を得ている。今後も、依頼機関のニーズに応じた研修計画、信頼できる運営・管理、確かな成果をご提供できるよう尽力していく。渡日前日本語研修を検討している機関からのご依頼を広く歓迎する。

4. 体験しながら学ぶ異文化理解活動

モンゴル・日本センターが実施する総合日本語講座では授業の一環として定期的に文化体験授業を行ってきた。2024 年からはこの文化体験授業の内容を基に、日本語や日本文化に興味を持つ全ての方々を対象とした外部向け文化イベントも実施するようになった。

2025 年には 4 種類の文化体験会を実施し、合わせて約 180 名が参加した。3 月には「日本書道」文化体験会を開催した。さらに、5 月に「ゼリーキャンドル」文化



体験会、8月に「お守り」文化体験会をそれぞれ実施した。11月には、モンゴル文化を紹介する試みとして、「モンゴル縦文字書道」文化体験会を行った。「日本書道」文化体験会では、日本の文字の起源や文化について紹介するとともに、書道の意義や異文化について自由に語り合う交流の場も設けた。当日は参加者の方々から、「日本語が未熟でも、書きたい言葉を日本語で書くことができ嬉しかった」などの感想が寄せられ、参加者の高い意欲が感じられる充実した時間となった。

日本のリメイク文化である「ゼリーキャンドルを作ろう」文化体験会では、飲み切ったヨーグルトやフルーツピューレの容器を再利用した。多くの子どもが家族や



写真 43. 「お守りを作ろう」文化体験会



写真 44. 「ゼリーキャンドルを作ろう」文化体験会

親戚と一緒に参加した。年齢が小さいにもかかわらず、日本の歴史や文化など難しい内容でも熱心に聞き、安全注意事項やマナーをしっかりと守りながら細かい作業に取り組んでいる姿は非常に誇らしく感じられた。

さらに、8月の「Japan Festival in Mongolia 2025」では、同イベントにスポンサーとして参加・出店した mobicom 社の依頼により、同社ブースで日本の「お守り」作りの文化体験を行った。個々の来場客に対して、「お守り」の意味や意義を紹介した後、作り方を説明し、参加者全員に「お守り」作りを体験してもらった。

その後、11月にはチンギス・ハーン生誕記念およびモンゴル誇りの日に合わせて、「モンゴル縦文字書道」文化体験会を実施した。これまで当センターでは主に日本語や日本文化の紹介を目的とした活動を行ってきたが、このイベントを契機としてモンゴル文化の紹介も積極的に行っていくこととなった。



当日は、「Bichig Soyol Center」講師で書道家の E. Ankhbayar 氏を講師としてお招きし、モンゴル書道の起源や書法について丁寧に紹介していただいた。さらに、参加者がモンゴル縦文字で好きな言葉を書けるようになるまでサポートしていただき、最後まで熱心にご指導いただいた。

本年もモンゴル・日本センターが実施した文化体験会にご協力くださった個人・団体の皆様をはじめ、参加者の皆様に心より感謝申し上げたい。これらの文化体験会を通して、多くの方々が日本・モンゴルの文化に出会い、家族や友人との忘れられない思い出を作ることができれば幸いである。

弊センターはこれまで、国際相互理解の促進を目的として文化交流事業を実施してきた。今後も本目標の実現に向け、モンゴルおよび日本の文化を紹介する文化体験会を継続して実施していくので、皆様の一層のご参加とご協力を賜りますようお願い申し上げます。



写真 45. 「日本書道」文化体験

写真 46. 「モンゴル縦文字書道」文化体験会

5. 受託事業及び受託コースについて

特定技能関連事業

2019 年から国際交流基金の委託により、特定技能制度の中でも日本語教育に関わる事業を実施している。本事業は主に下記の 3 つに分かれている。

- 国際交流基金日本語基礎テスト (JFT-Basic) 関連業務
- 現地の教師支援活動
- 日本語学校や送出機関の情報収集、コンサルティング活動

「国際交流基金日本語基礎テスト (JFT-Basic) 関連業務」については、JFT-Basic の認知度を高めるとともに受験者数及び合格者数を増やすため、JFT-Basic の実施日



程に関する情報を常時提供し、JFT-Basic に関する問い合わせにも対応している。加えて、「JFT-Basic 国際交流基金日本語基礎テストガイダンスセミナー」を 1 回実施し、計 24 名に試験の概要、申込方法、対策教材等について紹介した。また、『『い
ろどり日本語オンラインコース』体験会』を 4 回実施し、計 83 名に「い
ろどり日本語オンラインコース」を実際に体験してもらった。

「現地の教師支援活動」については、『い
ろどり』教科書や日本文化・習慣等に関する教授法の普及や教授経験の共有を行っている。第一に、「『い
ろどり 生活の日本語』教科書を使った教授法セミナー」を 1 月、9 月の 2 回実施し、計 34 名に『い
ろどり』教授法を紹介して模擬授業をしてもらった。第二に、モンゴル労働・社会保
障省労働福祉サービス庁（GOLWS）との共催、English Academy of MUST、モン
ゴル高専カレッジ、GTN MONGOLIA 社との協力の下、「『特定技能』制度につ
いての情報交換会」を 3 月に実施し、74 名に特定技能制度の実施状況、試験、手続な
どに関する情報を提供した。第三に、国際交流基金、在モンゴル日本国大使館との
共催で、日本語学校・送出機関向けに「JF 公募プログラム説明会」を 11 月に開催
し、来場者 80 名に公募プログラムの申請方法、注意事項等について紹介した。

「日本語学校や送出機関の情報収集、コンサルティング活動」については、日本
語教育機関調査リストの情報更新を行うとともに、リスト中の機関に対して特定技
能制度関連の日本語教育活動や JF 公募プログラムに関する情報を随時提供している。
さらに、2 機関と日本語教育相談を行い、コンサルティングに努めた。

10 月にはダルハン市に出張した。同市への出張は 4 年ぶり 2 回目である。出張で
は、まず市内の日本語学校 3 機関への視察・コンサルティングを行った。続いて
『『い
ろどり 生活の日本語』教科書を使った教授法セミナー』を市内・近隣都市の
日本語教師 15 名に対して実施した。また、「Japan Discovery Day」日本紹介イベン
トにおいて、イベント参加者約 150 名に JFT-Basic テストや「い
ろどり日本語オン
ラインコース」を紹介した。

モンゴル JDS 来日準備日本語講座

2021 年より毎年受託していて、2025 年で 5 回目である。今回は 4 月 14 日～6 月
27 日の 2 カ月半、全 32 回計 65 時間にわたって開講した。受講者は JDS プログラム



で日本の大学院に留学する予定の13名である。2025年も例年同様、『いろどり生活の日本語 入門 (A1)』を教科書として使用そのトピックを絞って学習した。また、最終日は日本人ボランティアとのフリートークを行った。最終的には受講者全員が無事に修了でき、2025年夏に日本へ旅立った。

「JICA インターンシッププログラム参加希望者対象の事前日本語研修」

本コースは独立行政法人国際協力機構「モンゴル国実践的教育機会を通じた工学系人材育成に係る情報収集・確認調査」を実施する特定非営利活動法人アジア科学教育経済発展機構からの受託事業であり、2025年の「冬コース」で2回目の実施となる。エンジニアとして日本でのインターンシップを希望する大学生・高専生を対象とした事前日本語研修である。詳細は特集コラムをご参照いただきたい。



Ⅲ. 受講生の声

2025 年秋期コース「11-13 歳の子ども向けまるごとコース」 受講生の感想

こんにちは。

私の名前は P.エンフドゥルグーンです。日本語の授業はとても楽しくて、収穫の多いコースだった。今まで知らなかった文字・単語、文法、会話の仕方などを学ぶことができたのは、先生方がやさしく、分かりやすく教えてくださったおかげだと思っている。授業の初日、たくさんの友達もできた。好きなことが似ている友達と仲良くなれて、本当にうれしかった。文化体験授業の日には、テーブルの上に調理器具や食材がいっぱい置いてあった。何を作るのかなと不思議に思っていたら、先生が「たい焼き」というお菓子の作り方を教えてくれて、みんなで作ったのがとても印象的だった。同級生の友達や先生方に心より感謝している。



写真 47. 2024 年夏期「11-13 歳の子どもまるごと」P.エンフドゥルグーン

2025 年秋期「11-13 歳の子ども向けまるごとコース」 P.エンフドゥルグーン

皆さん、こんにちは。

私は 2025 年秋に開講した「11-13 歳の子ども向けまるごとコース」の受講生のエンフドゥルグーンの母である。息子は数年前から日本語に強い興味を持ち、自分で学習を始めた。そこで主人と話し合い、より良い学習環境で内容も充実した日本語学校を探していたところ、2025 年秋からモンゴル・日本センターで行われる日本語コースに出会い、期日内に登録して息子を受講させることにした。このコースは私にとっても息子にとっても非常に満足できるものだった。受講生の子どもたちが主体的に学習できるプログラムに基づく教科書と副教材があることに加え、授業時間も有意義だった。そして、先生方の教え方もとても面白くて分かりやすく、授業の雰囲気からもその工夫が伝わってきた。本当に感謝している。



また、必要な情報をその都度丁寧に共有していただけた点も、大変ありがたく感じている。今後も息子と一緒に頑張って、引き続き次のレベルのコースにも参加できることを願っている。

皆様の今後のご成功を心よりお祈り申し上げます。ありがとうございました。

受講生エンフドゥルグーンの母

「総合日本語3コース」感想

私の名前はB.ウレムジです。北海道帯広市で生まれました。生後10ヶ月の時に家族がモンゴルに帰国したため、生まれ故郷についてもっと知りたいという思いがずっとありました。この希望は、やがて日本で勉強して仕事に就くという夢へと発展し、その夢を実現するための第一歩がモンゴル・日本センターで日本語コースを受講することでした。現在、私は総合3コースを無事に修了し、総合4コースの受講に向けて準備を進めています。日本語を学びながら、新しい言語を学ぶだけでなく、自分自身の可能性を広げ、自信を少しずつ高めています。



写真 48. 2025 年秋期
「総合日本語3コース」
B.ウレムジ

最初は外国語を話すときに間違いを犯したり、自分の考えを十分に表現できなかったりするのではないかと不安でしたが、今では勇気が出て、学ぶ意欲も高まりました。日本語を学ぶことは、語学力の向上だけでなく、私自身の成長にも繋がっていると感じています。コースでは、最初からしっかりと基礎が築かれ、その後の学習に非常に役立ちました。基本的な概念が明確で理解しやすかったため、次のレベルに進むにつれて、日本語学習がさらに面白くなりました。これはコースの質と講師の指導方法に直接関係していると思います。

また、このコースの成績優秀者割引券は、私の日本語学習の道をさらに明るく照らし、より目的意識を持って粘り強く学習する意欲を高めてくれました。先生方は皆、親しみやすく責任感があり、その教え方も興味深いです。そして、学習プロセ



スと授業システムは非常に体系的です。このコースの最大の利点は、学生の知識を長期にわたって定着させることを目指して設計されている点だと思います。

総合3コースまでの受講中、北海道の札幌を訪れ、私の夢の第一段階が実現しました。この街がとても気に入り、将来この街で自分の好きな職業に就くという自信がさらに深まりました。最後に、私に知識、インスピレーション、そして自信を与え、常に支え続けてくださったモンゴル・日本センターの先生方、クラスメートの皆様に心から感謝申し上げます。皆様のご尽力、指導方法、そして共に過ごしたすべての時間は、私の将来の目標の達成により近づくものとなりました。

2025年秋期「総合日本語3コース」B.ウレムジ

～自分に合ったやさしい方法で日本語を学ぼう～

こんにちは。私の名前はドゥルです。私はウランバートル市の第53番学校の12年生です。これまで、日本語を本当に身につけることができるのか、そもそも学び始めることができるのかと、不安に思うことが多くありました。しかし、その不安はやがて解消され、モンゴル・日本センターで日本語の学習を始めることになりました。



写真 49. 2025年秋期
「総合日本語5コース」
B.ドゥル

最初は期待と同時に、少しの緊張もありました。まるで小学校1年生になったばかりの子どものような気持ちでした。それでも、日々学習を重ねるうちに、日本語の力が少しずつ伸びていることを実感し、この場所で確かに成長していること、さらには慣れてもっと好きになっていることを感じるようになりました。今まで一度も失望して帰ったことはありません。このセンターでは、建物の入口から教室に至るまで、いつも清潔で落ち着いた環境が整っており、温かく安心できる雰囲気を感じられるからでしょう。学習を続ける中で、クラスみんなで上を目指し、つまずきそうになるたびに先生方から励ましの言葉をいただき、前に進んでいく姿勢が自然と身につきました。先生方の指導力はもちろんのこと、自分自身の努力によって成長していくことの大切さも学びました。



今、私たちはそれぞれの道を前に進み始めています。日本語という大きな海を、まだ渡りきったわけではありませんが、進むための方法や考え方を身につけたことで、もう迷うことはないと感じています。

最後に、このセンターのことを私は決して忘れられないでしょう。いつも温かく、クラスメートや先生方の優しい笑顔が心に残っているからです。ここまで、自分にとって最も安心でき、最も充実した環境で日本語を学べたことに、本当に満足しています。

この受講感想を読んでくださっている皆さんも、もし「やさしく、楽しく、そして着実に」日本語を学びたいと思っているなら、ぜひモンゴル・日本センターを選択肢の一つとして考えてみてください。

2025年秋期「総合日本語5コース」B.ドゥル

「JICA インターンシッププログラム参加希望者対象の事前日本語研修（夏コース）」感想

こんにちは。私の名前はウジンと申します。モンゴル科学技術大学情報システム学科の4年生です。

昨年、3年生のときに日本でのインターンシッププログラムに参加するため、モンゴル・日本センターで7か月間、日本語研修を受けました。高校時代から日本へ行くことが夢だった私にとって、この研修は日本語だけでなく、日本の文化や生活、地理、人々の考え方や性格を学ぶ大変貴重な機会となりました。

初日に詳しく計画された日程表をいただき、とてもよく組織されていると感じました。試験日程や担当の先生、授業内容が明確で、大学の授業やアルバイトと両立するうえで大変助かりました。

大学に入ってからほとんど忘れてしまった日本語も、先生方の丁寧な指導と温かいサポートのおかげで短期間で取り戻すことができました。毎週の復習と課題、小テストを組み合わせた学習方法は効果的で、会話・文法・リスニング・作文をバランスよく学べたことも上達につながったと思います。



写真 50. 「JICA インターンシッププログラム参加希望者対象の事前日本語研修（夏コース）」M.ウジン



研修開始時には会話が苦手でしたが、修了時には自分の考えを十分に表現できるようになり、7月には日本で21日間のインターンシップを経験することができました。学んだ知識を活かして多くのことを経験し、視野を広げられたことに大変満足しています。

先生方は親切で、まるで友達のように温かく接していただき、いつも安心感を与えてくれました。モンゴル・日本センターの皆様には心から感謝しています。

この場をお借りして、皆様に感謝の気持ちをお伝えするとともに、今後のご活躍とご発展を心よりお祈り申し上げます。

「JICA インターンシッププログラム参加希望者対象の事前日本語研修（夏コース）」

M.ウジン



IV. 図書交流課





I. 2025 年図書・交流課活動全般

モンゴル・日本人材開発センター（以下「モンゴル・日本センター」）の図書・交流課は、モンゴル・日本両国の相互理解を深める目的で、図書室の運営ならびに「市民講座」、「定期映画会」、「JF 文化日本語講座」、日本留学を希望する学生・生徒を対象とした「日本留学フェア」を開催し、博報堂教育財団の「日本語交流プログラム」も実施している。

当課はコンピューターコースも担当しており、2025 年には「タイピングコース」を対面とオンラインで計 9 回実施した。

1. 図書室運営

2025 年 12 月末時点で、図書室利用者登録数は約 30,000 名であり、年間の図書室利用者数は延べ 4,995 名である。

図書室の蔵書数は約 10,000 冊にのぼる。また、日本の大学・日本語学校の案内、留学に関する資料は 100 校を超えている。2025 年は新たに約 158 冊の蔵書が加わった。これまで図書室に図書を寄贈してくださった個人、団体、出版社の皆様には感謝の意を表したい。

図書室の運営のほか、日本文化の普及を目的に、日本の民族衣装である浴衣や着物のレンタルサービスも行っている。2025 年はおよそ 40 の個人・団体に対して、浴衣・着物 80 着以上とそれに付随する小物類を貸し出した。

図書室内の掲示板では、利用者向けに様々な情報を紹介している。在モンゴル日本国大使館が実施する国費留学試験、モンゴル日本語教師会が実施する JASSO の私費留学試験（EJU）と国際交流基金の日本語能力試験（JLPT）など、日本語学習者にとって重要な試験情報を提供している。

2. 読書会

4 月、読書を愛する子ども・青少年および一般の方々を対象に、新しく出版された日本文学作品の翻訳者との交流会を開催した。今回は、「Itgel & Maral パブリッシング」創設者であり翻訳者の D.マラルゴー氏をお招きし、同社より刊行された森絵都著『カラフル』および馳星周著『少年と犬』の 2 作品について紹介・対談を行った。当日は、両作家の経歴や創作活動についての紹介に加え、翻訳の仕事に関する興味深い話が披露された。特に若い参加



者にとって有意義な機会となり、参加者からも高い関心と好評を得た。『カラフル』は、主に思春期の読者およびその保護者を対象とした作品である。本作品は日本国内のみならず国際的にも高く評価されており、発行部数は100万部を超えている。また、英語、タイ語、韓国語、ベトナム語などに翻訳・出版され、日本およびタイでは映画化もされている。一方、『少年と犬』は、2011年3月11日に発生した東日本大震災の後の時代を背景にした作品であり、日本国内で30万部以上を売り上げている。飼い主を探して旅を続ける一匹の犬が、道中で出会う多くの人々の人生に寄り添い、支えとなっていく姿を描いた感動的な長編小説である。

3. 市民講座

市民講座はモンゴル・日本センター開設以来、定期的に行われてきた。2025年で85回目として開催した市民講座では、『モンゴルのフェルト ― 過去と現在』の著者であり、モンゴル国顧問エンジニアのB・エルデネツェツェグ氏を講師としてお招きし、フェルトおよびフェルト製品の製造技術に関する紹介講演を行った。(詳細は「コラム」を参照)

4. 受託事業

毎年恒例の博報堂教育財団「日本語交流プログラム」では、2025年の第15回プログラムも順調に進行できた。今回のプログラムでは新モンゴル小中高一貫学校の日本語教師V.トゥブシンジャルガル氏が選ばれ、海外教師日本研修に参加した。その後、生徒・教師が参加する日本語交流プログラムも無事に終了した。

また、第16回プログラムがスタートし、ウブスハンガイ県のメルゲド学校の日本語教師D.ドラムスレン氏が選抜され、2025年11月の海外教師日本研修に参加し、2026年5月に生徒と共に日本語交流プログラムに参加する準備を進めている。

上記受託事業のほか、京都先端科学大学、新潟県立大学、新潟県学校間マッチングなどの受託授業も実施した。また、日本学生支援機構(JASSO)やFranchir社の翻訳業務を行った。

本年より、新たな長期受託事業として、10年間にわたりJFが実施する「日本語パートナーズ派遣事業」のモンゴル派遣準備業務に着手した。本事業は、2024年より開始したJFの長期プロジェクトであり、ASEANを中心とするアジア諸国の中等教



育機関に日本人を日本語アシスタントとして派遣し、日本とアジアの相互理解を深め、交流を拡大することを目的としている。

表-9: 市民講座

No	タイトル	講演者	実施日	場所	参加者数
1	No.85.「フェルトに息づく一遊牧民の知恵」	モンゴル国顧問エンジニア・准教授、主著『モンゴルのフェルト：過去と現代』 講師：B. エルデネツェツェグ氏	2025.11.08	多目的室	11
合計					11

表-10: 受託事業

No	事業名	実施日	対象者	場所	参加者数
1	博報堂教育財団「日本語交流プログラム」	2025.5.11	中等教育機関 日本語教師	日本、東京	6
2	新潟県学校間マッチング	2025.5.22-11,28	NSG グループ、事業創造大学院大学、新潟薬科大学、モンゴル国立大学、モンゴル農業科学大学、人文大学、Ih Zasag 大学、第 23 番学校、Nomt Naran 学校、Hobby 学校	ウランバートル市	22
3	JASSO “Study in Japan 基本ガイド 2025-2026” モンゴル語版作成作業	2025.9.10	JASSO	Impress Colour LLC	1
4	京都先端科学大学の受託事業	2025.10	京都先端科学大学	ウランバートル市での学校訪問	354
5	日本語パートナーズ受託事業	2025.10	国際交流基金 (JF)、MOJC、文部科学省、小中高等学校	ウランバートル市	28
合計					411



表-11 :JF 文化日本語講座

No	講座名	実施日	対象者	場所	参加者数
1	ひな祭り	2025.3.15 2025.3.22	生徒	多目的室、 204、205 号室	48
2	子供の日	2025.5.10	生徒	多目的室	27
合計					75

表-12: 図書室利用者数

月別	2025												合計
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
利用者数	128	373	429	600	384	308	225	268	687	693	501	330	4926

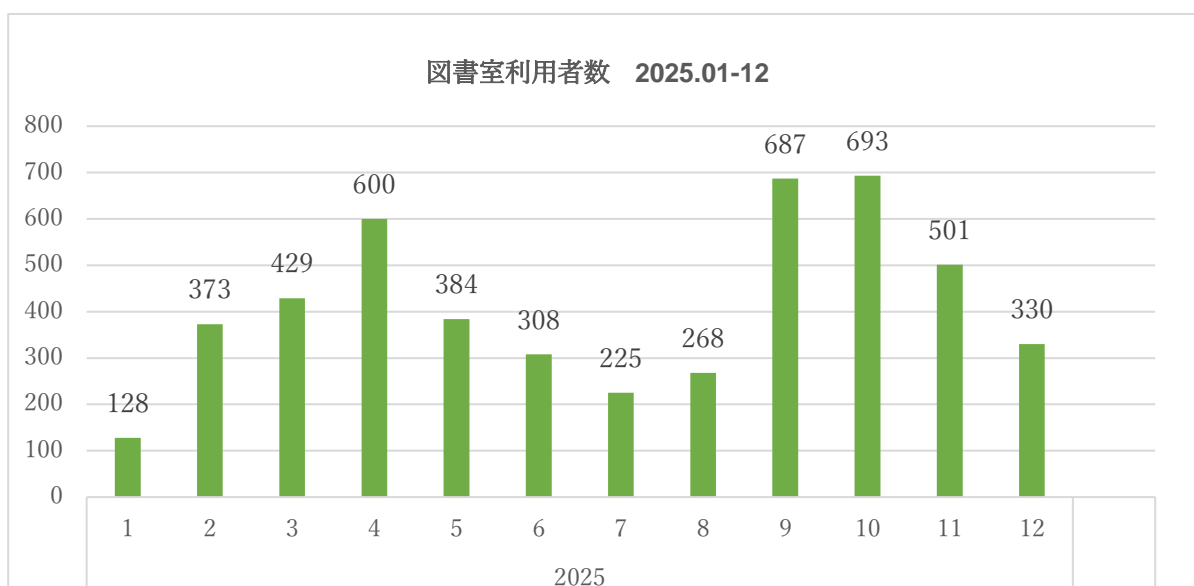


表-13: 読書会

No.	タイトル	講演者	実施日	場所	参加者数
1	森絵都『カラフル』、 馳星周『少年と犬』	『イトゲル・マラル・パブリッシング』創設者・翻訳者 D.マラルゴー	2025.4.2	多目的室	14
合計					14



表-14: 日本文化紹介事業

No	タイトル	実施日	場所	参加者数
1	モンゴル・日本友好新善記念日本クイズ大会、日本文化体験(茶道)	2025.9.06	多目的室	23
合計				23

表-15: 日本語・文化交流部の協同事業

No	タイトル	講演者	実施日	場所	参加者数
1	モンゴル縦文字書道	「Bichig Soyol Center」 講師・書道家 E.アンフバヤル	2025. 11.25	多目的室	11
合計					11

表-16: タイピングコース

No	コース名	期間	回数	内容	講師名	参加者数
1	ハイブリッド タイピングコース	2025年1月~12月	9回	「MonTT」タイピングプログラムを利用した、タッチタイピング演習。	T.ボロルマー	67
合計						67

出典：モンゴル・日本センター図書交流課月次報告



II. コラム

1) 「2025 年度の日本留学フェア」

モンゴルの将来を担う学生・若者たちが、世界標準の教育を身につけられるよう支援することを目的として、4月に「春の留学フェア」、10月に「日本留学フェア」をそれぞれ成功裏に開催した。春・秋合計で1,500名以上の日本での留学を希望する学生・若者が参加し、自分に必要な情報を得た。

～春の日本留学フェア-2025～

開催場所: モンゴル・日本センター

開催: 2025年4月19日(土) /ハイブリッド形式/

参加大学: 金沢大学、京都先端科学大学、福井大学、立教大学



写真. 51. モンゴルアニメーション協会(NPO) E.タミル氏

「春の留学フェア」は、高校生・大学生を対象に、日本での留学に関する指針を提供し、個々の準備を支援することを目的として開催した。当日のプログラムには、日本留学に関する概要紹介、日本政府奨学金制度、日本でのアニメーション分野の学び方に関する

講演などが含まれ、特色ある内容となった。また、会場の様子はオンラインでも同時配信され、地方の学生・若者たちにも情報を得る機会を提供した。

表-17. 「春の日本留学フェア-2025」参加大学

 金沢大学	 京都先端科学大学	 国立大学法人 福井大学 UNIVERSITY OF FUKUI 福井大学	 立教大学
---	---	---	---

～日本留学フェア-2025～

開催場所: モンゴル・日本センター

開催: 2025年10月4日(土)、5日(日) /対面形式/

参加大学(対面参加): 慶應義塾大学、京都先端科学大学、国際大学、東京国際大学、兵庫県立大学、中央学院大学

資料参加: 武蔵野大学、名古屋商科大学、山形大学

2025年秋の「日本留学フェア」のプログラムには、日本政府奨学金制度の紹介、日本留学に関する概要(JASSO)、日本語能力試験(JLPT)や日本での私費留学試験(EJU)の紹介、EJU数学試験の対策セミナー(城東教育センター)、奨学金を受けて留学した学生の体験談、参加大学の紹介および各大学の個別相談コーナーなどが含まれ、



写真. 52. 城東教育センター ASAMI YOSHINARI

来場した学生・若者たちが総合的に情報を得られる機会を提供した。学生たちは、自分の希望する学部・学科の個別相談コーナーを訪れ、奨学金制度に関する情報だけでなく、必要な情報をしっかり入手できたことと思われる。来年も、学生たちの希望する専攻で入学を受け入れる大学・機関の代表者が「日本留学フェア」に参加し、学生たちに有益な情報を提供してくれることを期待している。

主催: モンゴル・日本人材開発センター

協力: モンゴル国立大学、日本帰国留学会 JUGAMO、モンゴル日本語教師会

後援: 在モンゴル日本国大使館、国際協力機構(JICA)、日本学生支援機構(JASSO)、モンゴル日本語教師会

表-18. 「日本留学フェア-2025」参加大学

 <p>慶應義塾大学 Keio University Tokyo, Japan</p> <p>慶應義塾大学</p>	 <p>京都先端科学 大学</p>	 <p>国際大学</p>	 <p>東京国際大学</p>	 <p>名古屋商科大学</p>
--	--	---	--	--



 <p>兵庫県立大学</p>	 <p>中央学院大学</p>	<p>世界の幸せをカタチにする。 Creating Peace & Happiness for the World</p>  <p>Musashino University 武蔵野大学</p>	 <p>Yamagata University 山形大学</p>
---	---	---	--

2) モンゴルで日本高校留学フェアを初開催

2025年、モンゴル・日本センターと茗溪学園の共催、在モンゴル日本国大使館およびJICAの後援により、モンゴル国内初となる高校留学に特化した「日本高校留学フェア」を5月（17・18日）と10月（25・26日）の計2回開催した。



写真 53. 個別相談の様子

高校留学という特定の層を対象とした初の試みであったが、5月469名、10月255名、計724名の来場者数を記録した。この結果はモンゴルにおける日本への高校留学に対する関心の高さを明確に示すものである。特に低学齢層の生徒を連れた保護者の来場が目立ち、

高校段階での訪日留学が早期の進路選択肢の一つとして現実的に検討されている状況が窺えた。学校教育段階で、約9,000名が日本語を学習しているというモンゴルの教育環境を鑑みても、高校留学の潜在的需要は極めて高く、本フェアを継続実施することの社会的意義は大きい。

具体的な成果としては、本フェアを通じて既に2名のモンゴル人が日本の高校へ進学しており、2026年4月からはさらに2名の留学が決定している。高校段階での異文化適応は、語学力や学力の向上のみならず、自立心の育成や将来のキャリア形成、ひいては両国の友好を支える「架け橋」となる人材の輩出に直結するものである。



また、本フェアは単なる留学情報提供の場に留まらず、書道教室やアニメ体験などの日本文化発信を同時に実施したことで、参加者が「日本文化を体感的に理解する」機会を創出した。こうした多角的なアプローチは、多くの参加者が日本をより身近に感じる契機となり、留学への心理的ハードルを下げる効果を果たしたと評価している。



写真54. 書道のパフォーマンスを行っている様子

今後はより多くの参加校を募り、日本の高校留学をより現実的な選択肢として提示できる体制を強化していく。本フェアの継続的な実施を通じ、より多くの生徒が日本で学ぶ道を選択できるよう支援し、両国のさらなる友好関係の発展に寄与する所存である。

参加回	学校名	特徴（簡潔）
5月・10月	茗溪学園中学校高等学校	IB（DP）対応、日本語・英語による授業、卒業後の多様な進路
5月・10月	仙台育英学園高等学校	IB（DP）対応、スポーツも盛んで全国レベルで展開
5月	文化学園大学杉並高等学校	日本+カナダの卒業資格を得るダブルディプロマコースあり
10月	オイスカ浜松国際高等学校	留学生が多く国際交流が日常、比較文化授業や海外研修あり
10月	水戸葵陵高等学校	医歯薬・特進i・進学Vなど多様なコースで進路を支援
10月	柳川高等学校	留学生受入（約80名等）、日本語コースと生活・進路支援

3)国際交流基金（JF）「日本語パートナーズ派遣事業」開始

①日本語パートナーズの変遷

日本語パートナーズ派遣事業は、2013年12月の日・ASEAN特別首脳会議で発表された新たなアジア文化交流政策「文化のWAプロジェクト～知り合うアジア～」の主要事業のひとつとして2014年度より開始され、2023年度までの第1フェーズにおいて、3,000人を超える日本語パートナーズを派遣してきた。第2フェーズとして、2023年12月の日本ASEAN友好協力50周年特別首脳会議で発表された包括的な人的交流プログラム「次世代共創パートナーシップ 文化のWA2.0」の取組みの一環として、2024年度から10年間に渡り「日本語パートナーズ派遣事業」を拡充して継続していくこととなった。これを受けて、2024年9月に行われた日本・モンゴル首脳会談において、今後進めていく主な二国間協力案件のひとつとして、モンゴルへの日本語パートナーズ派遣に向けた取り組みを行うことが確認された。

②日本語パートナーズとは

本事業は、ASEANを中心とするアジア諸国の中等教育機関に日本人を日本語のアシスタントとして派遣し、日本とアジアの相互理解を深め、交流を拡大することを目的としている。日本語パートナーズの使命は、現地日本語教師の教育活動をアシスタントとして支援するとともに、教室内外での学習支援や文化活動を通じて、日本語と日本文化の魅力を広めることである。また、日本語パートナーズ本人にとっては、生徒や教師、地域の人々との交流を通じて、派遣国について学ぶ貴重な機会でもある。



写真55. 短期日本語パートナーたちが日本の遊びと一緒に楽しんでいる様子



写真 56. 短期日本語パートナーたちが日本の遊びを一緒に楽しんでいる様子

携インターン派遣」では、日本語教育機関における日本語教育の支援及び現地の人々との交流及び相互理解の促進・深化を目的として、ASEAN 諸国を中心とするアジアの高等教育機関を中心に、日本国内の大学等で日本語教育を専攻する学生を派遣している。

また、本事業には「長期派遣」「短期派遣」及び「大学連携インターン派遣」の3つのプログラムがある。それぞれの派遣期間は「長期派遣」が6か月程度～1年未満、「短期派遣」が1週間程度となっている。「大学連

③モンゴルにおける日本語パートナーズ事業について

モンゴルでは、2025年10月に短期派遣プログラムの日本語パートナーズ8名を派遣された。そして、2026年10月に長期派遣プログラムの日本語パートナーズ5名を派遣できるよう調整を進めている。

4) 一般向けモンゴル・日本文化紹介特別講座および公開セミナー

モンゴル・日本センターは開設以来、モンゴルの市民に日本文化を紹介し、モンゴルにお住まいの日本人の方々にモンゴルの文化・生活様式を紹介するといった文化事業・セミナーを毎年継続的に実施してきた。

2025年、日本国天皇皇后両陛下がモンゴル国をご訪問になった歴史的な機会を迎え、日本の文化・伝統をモンゴルの皆様に紹介することはモンゴル・日本センターの重要な役割の一つであると考え、茶道の日本文化体験を開催した。こうした文化事業の実施にあたっては通常、当該分野の専門家を講師として招聘している。今回は茶道講師のB.トゥブシンザヤ氏をお招きし、



写真 57. 日本文化体験（茶道）

茶道の歴史や由来、使用される道具などについてご紹介いただいた。その後、参加

者同士でお茶を点て、もてなし合いながら、茶道の精神と作法について理解を深めた。

また、茶道に関する学習にとどまらず、「日本をどれだけ知っているか」をテーマとした日本クイズ大会も同日に実施し、優勝者には賞品を授与した。参加者の皆様からは、アンケートを通じて「学びの多い充実した休日を過ごすことができた」との満足の声を多数いただき、今後も引き続き文化紹介や研修を実施していく大きな励みとなった。



写真 58. 日本クイズ大会

本年 11 月に開催した第 85 回市民講座では、モンゴル人の日常生活において身近でありながら重要な伝統素材であるフェルトおよびフェルト製品をテーマに取り上げ



写真 59. 第 85 回市民講座「フェルトに息づく-遊牧民の知恵」

げた。講師として、モンゴル国のモンゴル国顧問エンジニア・准教授でもある B.エルデネツェツェグ氏をお招きした。B.エルデネツェツェグ氏が日本語で出版した著書『モンゴルフェルト過去と現在』をご紹介いただくとともに、フェルト製作の技術

について解説していただいた。さらに、参加者が実際にフェルト作りを体験する機会を設けたことにより、非常に特色ある有意義なセミナーとなった。

また、11 月には日本語・文化交流部共同の文化事業として「モンゴル書道」特別講座を開催した。モンゴル文字は近年、国家文書行政の分野においても再び活用されるようになり、一般市民の間でも学習や実践への関心が高まっていることが、本講座への参加状況からもうかがえた。本講座は、11 月 25 日の「国家宣言日（モンゴル誇りの日）」に合わせて実施した。



「文字・文化センター」のモンゴル文字講師であり書道家の E.アンプバヤル氏を招聘し、モンゴル文字の起源や書道に関する興味深い講義をしていただくとともに、筆の持ち方や墨の扱い方について実技指導を受けた。参加者はそれぞれ自分の好きな言葉を筆と墨で書き、記念として持ち帰った。初めての体験であり、思い通りに書くことは容易ではなかったが、皆熱心に何度も挑戦し、最終的にはそれぞれが満足のいく作品を完成させ、本講座は成功裏に終了した。



写真 60. 「モンゴル縦文字書道の特別講座」実施様子

今後も文化事業の企画にあたっては、単に聴講・見学する形式にとどまらず、参加者が実際に体験し、主体的に関わることのできる内容を重視して実施していく所存である。



V. 総務課





I. 2025 年総務課活動全般

モンゴル・日本センター総務課の経理、人事、IT、公文書作成・管理、清掃、設備、警備という基本業務の 2025 年の達成率は 91% となった。

コロナ禍が収束して数年が経過したが、引き続き消毒、感染対策を徹底的に行った。また、モンゴル・日本センター内のリソースを活用して、建物や施設の管理を着実に実行したことで、職員及び来場者にとって安全かつ快適な環境を整えることができた。前年に続き、事業達成度が高く評価されたことは職員皆の努力、協力の結果である。

2025 年度に実施した修繕及びその他の作業

実施業務	計画 2025	実績見込み 2025
日本の大学からのインターンシッププログラム	関西学院大学- 1 名 東北公益文科大学- 4 名	関西学院大学- 1 名 東北公益文科大学- 2 名 東洋大学- 4 名
モンゴル国立大学のインターン	アジア研究学科 - 4 名	アジア研究学科 - 4 名 科学技術大学 - 1 名
日本留学相談窓口	68 名	83 名
「日本人向けの初級モンゴル語講座	7 名	3 名
Power Bi 講座	15 名	23 名
和歌山高等専門学校モンゴルスタディツアー	-	6 名
山形県知事の来訪		30 名
キャリア開発計画承認	-	
プログラム品質・認証委員会の規程承認	-	プログラム委員会の設置について、ワーキンググループ会議で協議している
研修費用の計算方法を改善	-	

施設利用実績

表-19. 主催機関別施設利用

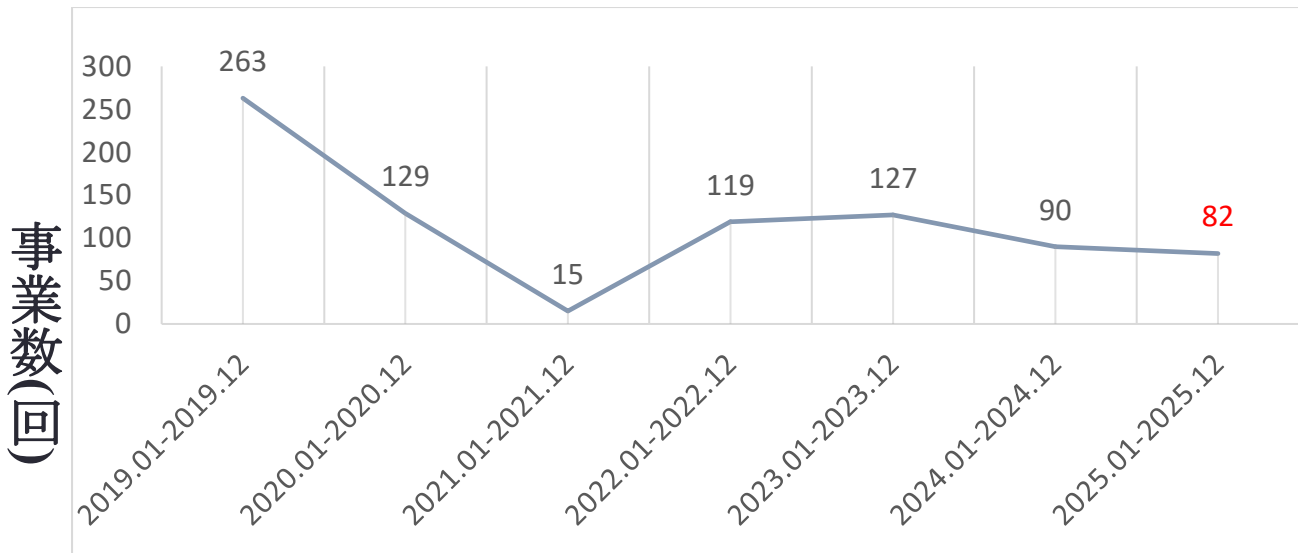
No	主催機関名	イベント実施数 (回)
1	在モンゴル日本国大使館	4
2	JICA	13



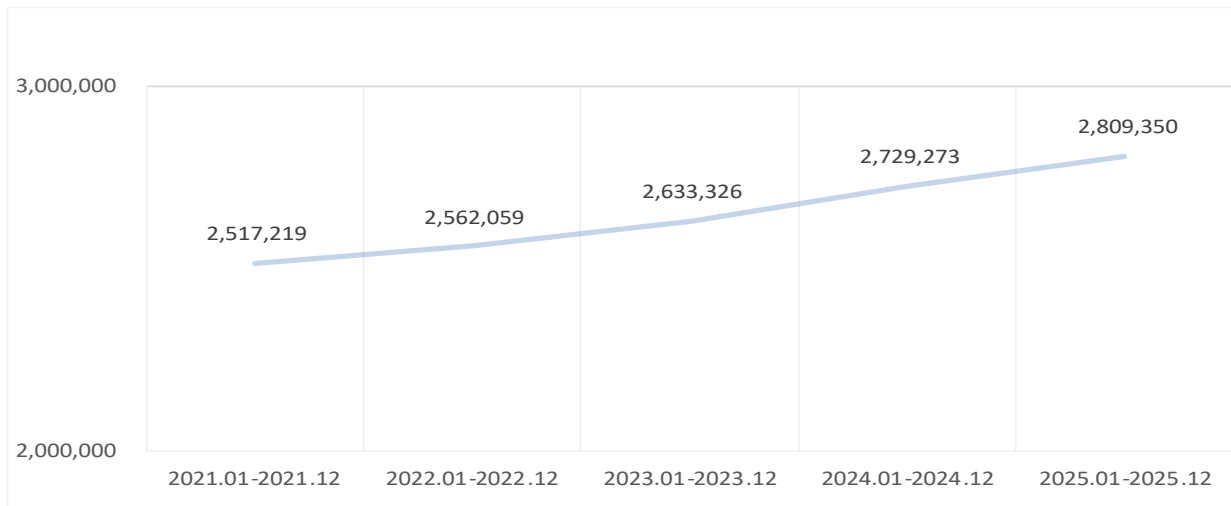
3	モンゴル国立大学	9
4	モンゴル日本語教師会	2
5	その他	54
合計		82

出典：モンゴル・日本センター総務課月次報告

過去7年間の施設利用実績



最近5年間の来場者 2025年12月31日まで：
合計 2,809,350名 (重複数)





II. コラム

1) ワーキンググループ

2025年1月15日の第2号所長令に基づき「モンゴル・日本センター規定制定・改正ワーキンググループ」を設立した。ワーキンググループは隔週で開催し、職員の見を集約して各規定の更新を行っている。

- 更新した規定：

「労働内部規定」

「職員評価、報奨、表彰規定」

「翻訳規定」

2) 「モンゴルと関わった50年」講演会

本講演は、元駐モンゴル日本国特命全権大使・清水武則氏がモンゴルとのご縁を持たれて50年目を迎えられたことを記念し、開催したものです。本講演において



写真 61. 元駐モンゴル日本国特命全権大使 清水武則氏

は、清水氏が長年にわたりモンゴルとの交流を通じて歩まれたご経歴や各種活動についてご紹介いただき、示唆に富む内容であった。また、講演終盤には、来場者各位より清水氏に関する思い出やエピソードが共有され、両国関係の発展に対する同氏の多大なるご貢献と、これまでの顕著なご功績が改めて称えられた。



写真 62. モンゴル人民芸術家 D. ソルバラム氏



VI. チーム活動

Япон хэлний сургалтын хэрэглэгдэхүүн

Сургалтын хэрэглэгдэхүүнийг хичээл тус бүрээр өнгөөр ялган байрлуулсан.

- Улаан өнгө: Цогц сургалт-1
- Улбар шар өнгө: Цогц сургалт-2
- Ногоон өнгө: Цогц сургалт-3 гэх мэт

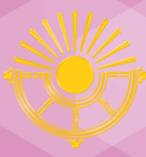
ТАЙЛАН
МОНГОЛ-ЯПОНЫ ХҮНИЙ НӨӨЦИЙН ХӨГЖЛИЙН ТӨВ

АРВАНСОЛООШТААР
2025.08

Монгол-Японь хүний нөөцийн хөгжлийн төв

СПОРТ ОЛДЛАГ 2025

У. З. Флипс



2025 年度の活動全般

モンゴル・日本センターの職員は各課の担当業務以外にも、業務改善、職員間交流の促進、さらには個人の能力向上のため、いくつかのチームに分かれて業務をしている。2025 年も全職員が「広報チーム」、「5S 改善チーム」、「健康・スポーツチーム」、「単独イベントチーム」、「互助会チーム」の 5 つのチームに分かれて活動した。

チーム活動によって、チームワークが高まり、他課のスタッフとの関係もよくなり、新しい改善案が出たり、自己成長にも繋がっている。

1. 広報チーム

広報チームは、モンゴル・日本センターをより多くの人に知ってもらうため、2016 年に構成した。モンゴル・日本センターが実施する各種コース・事業イベントに関する情報の発信、モンゴル・日本センターとモンゴルに関する情報の提供を目的としている。2025 年は、6 名のメンバーで活動した。

2025 年の活動概要：

No	日付	活動内容	説明
1	2025 年 4 月	モンゴル・日本センター年報の作成	事業報告書として年報を作成・公開している。2025 年版は 17 回目にあたり、オンラインで公開した。
2	2025 年	モンゴル・日本センターの事業広報用のポスター作製	モンゴル・日本センター事業の広報のため、200 以上のポスターと 20 以上のバナー・スタンドを作成した。その結果、4,000,000¥ のコストを削減し、7,000,000¥ の収益を得た。
3	2025 年	ソーシャルマーケティング	フェイスブックのフォロー数が 15% 増え、77,000 となった。インスタグラムも積極的に活用し、フォロー数が 2,6610 になった。約 4,200 のチャットに対応し、フェイスブックのページやグループに対する 10 回のハッカー攻撃を防ぐことができた。
4	2025 年	チームメンバー	新メンバーはチーム活動を完全に把握していないので、旧メンバーがもう 1 年残り、アドバイスをしながら一緒に協力して活動した。



2. 5S 改善チーム

モンゴル・日本センターでは、2016年より5S改善チームの活動を継続している。本チームは職員の自主的な発案により始まり、整理・整頓・清掃・清潔・躰といった基本の徹底から、モンゴル・日本センター内のさまざまな改善案の実践まで幅広く取り組んでいる。今年度は4課から7名がメンバーとして参加し、「学ぼう、改善しよう、広めよう」をスローガンに活動を行った。

主な取り組み

1. 改善案評価基準の制定

これまで改善案の評価方法が年度ごとに異なっていたため、2025年は評価基準の明確化に取り組んだ。過去の事例を整理し、専門家の助言も受けながら新しい規定を制定した。この規定が全職員が参加するワーキンググループでの検討を経て承認された。2026年から、職員が提案した改善案を実行するにあたり、それに対する評価を年2回実施し、年末に評価結果に応じたボーナスを支給する予定である。

✓ Кайзэн саналыг дараах 5 шалгуурын дагуу 1–5 оноогоор дүгнэнэ:

Шалгах үзүүлэлт	Үнэлгээ
1. Төвийн стратегийн зорилгод чиглэсэн эсэх	1 · 2 · 3 · 4 · 5
2. Төвийн үйл ажиллагаанд хэр ач холбогдолтой эсэх	1 · 2 · 3 · 4 · 5
3. Асуудлыг оновчтой, бүтээлч байдлаар шийдсэн эсэх	1 · 2 · 3 · 4 · 5
4. Хэрэгжүүлэхийн тулд зүтгэл гаргасан байдал	1 · 2 · 3 · 4 · 5
5. Өдөр тутмын үйл ажиллагаанд нэвтэрсэн эсэх	1 · 2 · 3 · 4 · 5
Нийт оноо	/25



Тайлбар: Кайзэн гэдэг нь шинэ бүтээл, оновчтой санааг амьдралд хэрэгжүүлж, тасралтгүй сайжруулах үйл явц

写真 63. 承認された改善案評価基準の一部



D. Хэрэгжүүлсэн Кайзэн / 実施改善							
№	Ажлын нэр/業務名	Хэрэгжүүлсэн Кайзэнгийн үр ашгийг 効果 / 時間数及び金額 など/	Эхэлсэн огноо/開始年月日	Дууссан огноо/終了年月日	Төлөвлөгөө / 計画	Гүйцэтгэл/実績	Тайлбар/備考 (研修受注者および研修の満足度)
1							
2		Цаг хэмнэсэн 時間節約					
3		Зардал хэмнэсэн コスト削減					
4		Орлого нэмсэн 収入増加					
5		Бусад 其他					
6							
7							
8	Нийлбэр				0	0	

写真 64. 実施した改善の効果記録フォーマット

2. ポジティブキャンペーンの実施

職員同士が感謝の言葉を伝え合う「サンクスカード」コーナーを更新し、前向きな職場づくりを進めた。



写真 65. サンクスカードの新デザイン

3. ワークショップの開催と提案促進

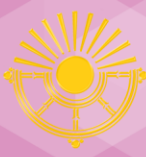
改善活動の活性化を目的とするワークショップを2回開催した。改善案を提出しやすくするためにQRコードを作成・設置するなどの工夫をした結果、2025年は31件の改善案が集まり、モンゴル・日本センター内の整理・清潔の維持向上につながった。



写真 66. 職員向けワークショップの様子



写真 67. ワークショップの成果



4. 外部発信に向けた取り組み

これまでの改善活動の経験を活かし、将来的には外部向けセミナーの企画・運営を行うことを目標に掲げ、2025年はその第一歩を踏み出した。

5S改善チームの2名がモンゴル・日本センターのビジネスコースを受講し、「5Sカイゼン活動の実践」への理解を深めるとともに、その内容を新職員へ共有した。また、チームメンバーはビジネスコースの運営補助にも携わった。さらに、モンゴル・日本センターの改善活動について、外部に向けてホームページおよびFacebookページで情報発信を行った。

3. 健康・スポーツチーム

目的:

モンゴル・日本センター内のスポーツの普及を通じて職員間のコミュニケーションを改善し、健康的なライフスタイルを取り入れる。

2025年の活動概要:

No	日付	活動内容	場所	備考
1	1月～12月 8:55～	朝の体操	ロビー	毎週月曜、水曜、金曜ラジオ体操、火曜と木曜に国立大学のオフィス用体操を全職員で実施。
2	5月	ビジネスコース修了生のスポーツ大会	多目的室、国立大学体育館	モンゴル・日本センター職員およびビジネスコースの修了生を対象に、3種目の大会を開催。
3	2月、12月	薬やその他の用品の補給	-	必要な薬やその他の用品を購入。
4	1月～12月	診断、アドバイス	多目的室、205号室	日本の伝統的な骨盤マッサージ
5	1月	国立大学教職員スポーツ大会	国立大学体育館	第2位入賞。